

グ
ラ
ン
パ
と
赤
い
塔

作・吉田小夏

【登場人物】

加納 盛・55歳（加納工業所の社長）
加納りつ・49歳（盛の妻）

高杉次郎・36歳（貴子の夫）

高杉貴子・31歳（盛の娘）

高杉ともえ・7歳（貴子の長女）

高杉幸子・4歳（貴子の次女）（病床・33年は登場無し）

二瓶鼓太郎・69歳（盛の遠縁の男・居候）

米田和子・33歳（古株の女中）

国松美代・23歳（新しい女中）

松島竹男・43歳（古株の社員）

佐々木 肇・25歳（新入りの社員）

木村 清・40歳（古株の社員）

小林 勇・32歳（渡り職人の鳶）

山村昭三・37歳（町医者）

水野ハル・32歳（バー灯の女）

※年齢は1958年4月から12月（昭和33年）のものとする。

昭和44年の高杉貴子・42歳・・・りつ役の女優が演じる
昭和44年の高杉ともえ・18歳・・・ともえ役の女優が演じる
昭和44年の高杉幸子・15歳・・・貴子役の女優が演じる
昭和44年の米田和子・44歳・・・和子役の女優が演じる

注・・・★と、☆のマークは同時に発語する。

● 場所・・東京。株式会社「加納工業所」を営む、加納家の住宅と、その界限。一階には、家族と従業員用の玄関があり、室内には、二階の住人である下宿人達も使える、共有スペースの居間がある。かつて簡易事務所としても使われていたこの和室の居間に、住み込み従業員達のお茶場にもなっている小ぶりのちゃぶ台や、簡単な客間として使う時の大きな座卓、古い木製の事務机、本やラジオの乗った小棚、座布団、などがあり、押し入れの襖には、季節の扇風機や火鉢をしまえるようになっていいる。室内は旅館のように廊下がいくつ走っており、共有スペースの和室の居間からは、庭に臨む広縁が続く。共有スペースの和室の横には階段があり、上の階には、書生部屋や、住み込みの従業員の部屋が数部屋（旧独身寮）あり、離れのようにも使われているようだ。二階の角部屋の窓には欄干があり、身を出して涼むことができる。玄関を出ると、広場を介して、事務所のある社屋や、資材置き場、現・独身寮の長屋、などの入り口と隣接しているらしい。一階の廊下の奥の上手側には、見えないお勝手や、女中部屋。下手側には、奥の間や仏間などがある。階段下の廊下を挟んだ一角には洋間もあり、洋間には応接セットがある。この洋間の奥には、ドアがなく続く部屋がもうひとつあり、そこにはどうやらピアノがあるようだ。庭からの光が洋間の大きな窓から射し込み、えんじ色の絨毯を照らしている。物語は、しばしこの建物の上空に飛び、自在な場所へと、舞台を移す。

● 時・・昭和四十四年の夏と、昭和三十三年の春夏秋冬。

● 空間・・登場人物が直接手や身体で触れるものは、具体的で、それぞれの時代を想像させる。その他は、できるだけ様々な場所や時間に見える空間であることが望ましい。

0-0-0 開場中

昭和四十四年（1969年）、七月十六日。水曜日。アポロ11号が、月に向けて地球を飛び立つその日。東京。城南五山の町にある、丘の上の古い家。昭和初期に建てられた、大きな文化住宅（和洋折衷の家）である。

まるで引越準備のように、家中の家具類にはこりよけの白い布がかけられている。応接セットのソファアールだけは布がかけられておらず、また、隣近所の家からラジオの音楽が薄く聞こえており、そのせいで、廃墟や空き家とは違う、微かな人の気配がある。夕方。時折、豆腐売りのラッパの音や、隣家の風鈴、家の側を通る車の音、等がする。開演7分前。

高杉貴子（42才 ※りつ役の女優）が、台所のある方向から登場。新盆に相応しい地味だが上質な夏のワンピースとネックレス。部屋の中を懐かしむように見つめ、ゆっくり歩き、広縁から庭を見る。やがて2階へあがる。2階の窓が開き、貴子が顔をのぞかせる。欄干に半身を預け、生まれ育った町を見下ろす貴子。

貴子 ……

空は、夕焼けになってゆく。貴子はしばし窓の外の夕陽を見つめていたが、やがて、ゆっくりと階段をおりる。階段を下りた貴子、再び広縁にゆき座り、庭を見つめる。夕焼けの色、濃くなってゆき、開演。

1-1-1 送り火を待つ夕焼け

立ちあがった貴子、和室の居間をしばし見つめると、そのまま洋間に向かい、洋間の窓から庭を見て、奥のピアノの部屋に行く。

米田和子（44歳）、お勝手の方向から登場。家政婦を思わせるいでたち。手に麦茶の載った盆を持っている。麦茶は古風なグラスの中で透き通り、時おり氷が鳴っている。和子、広縁に向かうが、貴子の姿が見当たらず。

和子 ……お嬢様？（小さく）

と、洋間の奥から、ピアノを弾く音がする。（ドビッシューの「夢」）

米田和子、洋間に行き、テーブルにそとと麦茶の入ったグラスを置き、盆を持ったまま、音楽に引き寄せられるようにゆっくり歩いてピアノの部屋に入り口に立つ。貴子の演奏は、音楽家のように流麗ではないのだが、青年時代に練習した曲であることがわかる。ピアノを弾く貴子の姿を、零れる夕陽の中でじっと見つめている和子。

和子 ……

貴子（声）あ……。うふふ。（和子に気がつき、笑って弾くのを止めて）

和子 ふふ……。優しく笑い返し）

貴子（声）覚えてる？この曲。

和子 ええ。

貴子（声） やあね、もう指が全っ然……。恥ずかしいわ。（昔はもう少し弾けたのに、という風に）

和子 もう少し、聞かせてくださいませんか？

貴子（声） え？

和子 貴子お嬢様がピアノを弾くと、奥様はいつも喜んでいらっしやいましたもの。今日だって、きつとどこかで聞いていらっしやるわ。

貴子 ……。

和子 ごめんなさい。あの、良かったら麦茶。冷たいうちに。

貴子（声） ありがとう。

貴子、ピアノの部屋から出て、洋間のソファに座り美味しそうに麦茶を飲む。和子、団扇で風を送り。

貴子 ああ、…美味しい。（しみじみと）

和子 だんだん似てくるって、本当なんですね。

貴子 ん？

和子 大人になると、男は父親に、女は母親に似て来るって言いますでしょう？ピアノの前にいる貴子様の姿見てたら、なんだか急に、奥様の後ろ姿、思い出してしまつて、私……。

貴子 ……。

和子 この洋間が、一番のお気に入りでしたものね。この部屋は空襲の時にも焼けなかったって、よくお客様に自慢して。

貴子 カズちゃんありがとう。

和子 え？

貴子 母のこと、たくさん思い出してくれて。

和子 それは……、だつて。

貴子 喜ぶわ。お母さん、よく言ってたもの。夏のお盆は、亡くなった人のことをゆっくり思い出すが、一番の供養なんですよつて。

和子 ……。

和子 貴子はまた麦茶を飲み、

貴子 ……ああ。麦茶はやっぱり、この家で飲むのが一番美味しい。

和子 うふふ。今日はハリキツテ、大麦から炒って作りまして。

貴子 ちゃんと淹れるとやっぱいいわね。夏の味がする。

和子 奥様直伝ですもの。

貴子 私も、母に教えてもらったのに。ダメね。今じゃ、お水にパックをポン！でおしまいだから。

和子 便利ですわねえ、アレは。私も初めて使ったときは本当に感動しました。

二人、少し笑い合う。

1-1-2 水羊羹と娘達

高杉ともえ（17歳）、高杉幸子（15歳）、玄関の方からそつと上がってきた様子で、恐る恐る部屋をのぞく。ともえは、高校の制服姿、幸子は中学の制服姿、という違いがある。二人しっかりお辞儀をする。

ともえ あのうち、お邪魔します・・・！

幸子 お邪魔します！（ペコリと深く頭を下げる）

和子 まあまあ。お二人とも暑いところをようこそ。

ともえ 和子さん、お久しぶりです。

幸子 お久しぶりです。

ともえ （貴子に）ごめんなさい、遅くなってしまつて。

貴子 大丈夫よ。送り火は、まだこれからだから。

ともえ 良かった。

和子 ともえちゃん、と幸子ちゃんが来てからにしようって、お待ちだつ

たんですよ？

ともえ あのコレ、ママに頼まれてたお菓子。

貴子 ありがとうございます。

ともえ お菓子、なのですが・・・。

貴子 どうかしたの？

ともえ あの。水羊羹の角が、すっかり欠けてボロボロになってしまいま

して。本当にごめんなさい！

幸子 ……。（ペコリと深く頭を下げる）

和子 あらら。じゃ証拠隠滅ですぐにお腹にしまっちゃいませうね。

ふふふ・・・。

和子、お菓子を預かり、お茶を出そうと台所に去る。

貴子 なあにどうしたの？

ともえ あの・・・新盆に食べるお菓子なのだから、ここはやはり、おばあ

ちやまの好きだったものにしましょう、ということになって、私

は水羊羹がいいと思ったのだけど、幸子が、おばあちやまは、シ

ュークリームが一番好きだった、って。シュークリームしかあり

えないって、言い出して。私は、そんなことあったかしら？って

思ったの。もつと言うと、このコ、自分が食べたいんじゃないか

しらって、ふと。

幸子 お姉ちやま・・・！（押し殺した声で悲痛に）

ともえ 水羊羹なら、グランパも大変お好きだったでしょう？って言った

のだけど、このコはまったく覚えてないって言い出すし、それで、

シュークリームなのか、水羊羹なのか、和菓子屋に行くか、洋菓子屋に行くかで話し合ってるうちに、すっかり時間がかかってしまつて、で、結局、水羊羹に・・・、

幸子 電気屋さん。(そつと、耳元で言うように)

ともえ え？

幸子 あと、電気屋さん。

ともえ

あ。そう、それで、和菓子屋さんで水羊羹を買つて、さあ急いでゆきましようとは歩いていたら、電気屋さんがありまして。店先のテレビでね、アポロ11号が、ついに今夜、月に出発するつてニュースが流れてて！それで、つい見てしまつて・・・。

貴子 アポロのニュースなら、今朝テレビで見たじゃないの？

ともえ だって、カラーだったの！衛星中継！ね？(さちに同意求め)

幸子 う、うん。

ともえ

そこからは本当に急ぎ足で、まるで走るような速さでその・・・、走っちゃつて。そしたら・・・。(お菓子が潰れたことを手で表し)もうわかつたから、お座りなさい。

貴子 和子、水羊羹の乗った皿を並べた盆を持って登場。

和子 さあ、どうぞ。(娘達と貴子に菓子をすすめ)おもたせで失礼しま

すが。

幸子 いただきます・・・。

麦茶と一緒に、欠けた水羊羹が並んでいる。

ともえ (ため息をつく)・・・。

ため息つかないの。おばあちやまもグランパも、水羊羹の角が欠けたくらいで怒る人じゃないでしょ？きつと、大笑いしてますよ。はい・・・。

ともえ どうですか？学校は？楽しい？

和子 来週から、やつと夏休みで。

ともえ そう。いいですわねえ、お休みですか？

貴子 今年の夏休みは、勉強がんばるんだもんね？

ともえ わかつてるつてば・・・。

和子 あら、お休みじゃないんですか？

油断すると第一志望の大学が危ないつて、先生に脅かされてしまつて、★アハハ(取り繕つて笑い)

ともえ ☆ハハハ・・・。(力なく苦笑)

貴子 あら、笑いごとじゃありませんよ？

和子 ご立派ですわねえ。こないだまで小学生だと思つていたのに。

幸子　ねえ、ママ。

貴子　ん？

幸子　どうして今年のお盆の提灯は、真っ白なの？

貴子　亡くなった方の最初のお盆の年は、白い提灯にするのよ。おばあちゃんの新盆だから、今年は白い提灯。

幸子　へえ、知らなかった。お姉ちゃん知ってた？

ともえ　もちろん。

和子　幸子ちゃんはそのうやって制服を着ると、女学校の頃の貴子様に、本当によく似てらっしゃって。

幸子　え。そうですか・・・？（照れくさそうに）

和子　だんだん似てくるって、本当なんですわねえ。

貴子　カズちゃんたら、今日はそんなことばかり言ってる。おセンチね。幸子ちゃんのお元氣そうな制服姿を見ると、私、嬉しくって。

和子　ともえ　え。和子さんが女学生の頃って、どんな制服だったの？

和子　私は尋常小学校しか出ていませんもの。ともえちゃんの年の頃には、もうこのお家で、女中をしていましたよ。

ともえ　そうだったんだ・・・。

貴子　ともえはよく、カズちゃんにホットケーキ焼いてもらったっけね。覚えてない？

ともえ　はあ、なんとなく・・・。

和子　そうだ、コレを見ていただかなくっちゃ！（立ち上がり）今朝、仏間をお掃除したら出てきたんですけど。

和子　幸子　和子、天体望遠鏡にかけてあった布を外す。旧式の家庭向けの天体望遠鏡が現れる。
わあ・・・。（天体望遠鏡の側に行き、珍しそうに見たりして）

貴子　こんなのあったかしら・・・？これ、どこに？

和子　仏間の押し入れの天袋を開けたら、奥にポツンと、この天体望遠鏡がありました。

幸子　これ、天体望遠鏡なの？初めて見た・・・。

貴子　こういうの、昔流行ってたのよ。お家用の天体望遠鏡。大人も子供も、月や火星を見てね。

幸子　へえ・・・。

貴子　そう、スプートニクって、ソ連の宇宙船が飛んだりして。ともえ、覚えてない？スプートニク二号！三号だったかしら？

ともえ　さあ。確か、ライカ犬って、犬が乗ったんじゃないっけ？

幸子　え！犬が宇宙に行ったの？

貴子　そうそう。

和子

あの・・・、差し出がましいようですが、出来ましたら工事の入る前に、もう一度だけ、運ぶものと捨てるもの、念のために見ていただく方が。悔いのありませんように。

貴子

・・・。

幸子

工事って何？

貴子

幸子にはね、今日話そうと思ってたんだけど・・・もう、おばあちやまも亡くなったし・・・、このお家、お盆が終わったら、壊して土地に戻すことになったの。

幸子

え・・・。お姉ちゃま知ってた？

ともえ

ああ、・・・うん。

幸子

へえ・・・そうだったんだ・・・。(動揺を抑えようと)

貴子

(幸子に)別に、隠してたわけじゃないんだけど。

幸子

いいよ・・・大事な話は、いつつもそうだもん。

貴子

幸子？

幸子

ご馳走様。私、お線香あげてきます。

幸子、

パーツと廊下の奥の部屋の方向に行ってしまう。

貴子

ごめんなさいね、ちよつと・・・。

貴子、

幸子を気にして後をおうように廊下の奥へ退場。

1-1-3 グランパの天体望遠鏡

和子

・・・。

ともえ

和子さんは、どこに住むんですか？

和子

え？

ともえ

ここ、無くなったら。

和子

大人ひとりですから、どうとでもなりますよ。むしろ、こんなに

ともえ

長く置いていただいて。

ともえ

でも・・・。

和子

もし、アポロ11号が月に到着したら、未来のいつか、月にもお

ともえ

家が建ちますかしら？

ともえ

え？

和子

そんな日が来たら私、都営住宅じゃなくて、月の団地に応募して

ともえ

みたいわ。

和子

月の町に行くの？

ともえ

ともえちゃん。私がおばあさんになったら、きっと月に遊びに来

ともえ

てね？ウサギと一緒に待ってますから。

和子

(笑って)カズちゃんたら！

和子

ふふふ。

ともえ あっ・・・！

和子 え？

ともえ これ、グランパにもらったんだわ！そう、そうだ。まだ、私がここに住んでた頃に・・・。

和子 ああ、そう言われれば・・・。旦那様が、いつだったかこんな大きい箱を・・・。

ともえ どうして忘れてたんだろ。

和子 仕方ありませんよ。子供の頃のお話ですもの。

ともえ はああ。(ため息)

和子 むしろ、工事の前に出てきて良かった。なんだかね、もう、シヨベルカーでガーツと一緒にたにされちゃうって話で。

ともえ ・・・・。

和子 ともえちゃん？

ともえ 私ね、この家が無くなる時が来るなんて、思ってたんですけど。

馬鹿でしょう？もし自分が引越したとしても、おばあちゃんの家だけは、ずっとここにあるような気がしてたんです。

和子 そう。

ともえ 勝手な話ですよ。

和子 ・・麦茶、入れなおしてきますね。(優しく)

ともえ 和子、退場。一人になったともえ、天体望遠鏡を窓際に運び、レンズを覗き空を見る。
・・・。

洋間に、ありし日の加納盛(55歳)が現れる。盛はまだ若く、ともえがこの家で暮らしていた頃の、働き盛りの姿をしている。

盛 ともえ、何が見える？

ともえ その声にそつとふりかえり。

ともえ ・・グランパ？！

盛 思い出してくれてありがとう。

ともえ え？

盛 水羊羹が好きだったことだよ。この季節はアレに限る。それに、

ともえ この天体望遠鏡。

ともえ あ・・・。

盛 送り火を焚く前に顔を出すなんざ不粋だとは思ってたんだが、どうしても、一言礼を言いたくてね。

ともえ そんな。

盛 私はね、星を見るためだけに、お前にそれをやったんじゃない。

それは特別な天体望遠鏡だ。日本の科学と技術に目を凝らし続け

たこの私が、お前のために特別の魔法をかけた望遠鏡だ。さあ、ともえ。そこから何が見える？

ともえ、再び天体望遠鏡のレンズをのぞく。

ともえ 闇です。見えるのは、何億光年も続く闇であります。

盛 大切なのは、その先さ。闇の向こうを、じっと見てごらん。必ず光りがあるから。

ともえ は、はいっ！！（必死で天体望遠鏡をのぞく）

盛 どうだ、ともえ。未来が見えたか？

ともえ ・・よく見えません。

盛 目を凝らしてごらんなさい？

ともえ 見えません。星も。未来も。

盛 ・・・。（励ますように、その手で、そつともえの頭に触れる）

ともえ グランパ。私、よくわからないの。

盛 ん？

ともえ 来年、受験するんです。先生とパパが、大学進学を勧めてくれて。

盛 素晴らしい。いいじゃないか。

ともえ でも、なんだか、私・・。なんだか、今年に入ってから急に、勉強、がんばれなくなってきたら・・。

りつ（49歳）と鼓太郎（69歳）が現れる。りつは、粹に襟を抜いた和

服姿。鼓太郎は、おおかえ運転手のような服装をしている。

りつ ともえ。迷子になった時はどうするのか、ちゃんと教えてやった

だろう？

ともえ ・・ママ？

りつ あれはデパートの屋上の遊園地だった。忘れたかい？

ともえ ママなの・・？？

りつ そうか。うちの貴子は、そんなに私に似てきたか。

ともえ ・・おばあちゃま！？

りつ （にっこりとうなづく）

盛 なんだ。もう車の時間か？

鼓太郎 は。まだ、アイドリング中でございまアす。茄子の牛の牛車とい

うのは、どうも温まるのに時間ばかりかかっていけませんな。

ともえ ？（鼓太郎を見る）

鼓太郎 覚えていらっしやいますか？居候の、鼓太郎じいじでございます。

ともえ コタジイ！

鼓太郎 おかげさまで、あの世でもまた、こうして社長に拾っていただき

まして。

ともえ おかえりなさい！

鼓太郎 はい。・・・せいじゃ、さいなら。また、来年のお盆に。

ともえ え？もう行ってしまふの？！

盛 出発の支度をしなきゃ。あっちは、少しばかり遠いから。

ともえ ・・・。

りつ ともえ。迷ったときには、恐れずにふりかえるんです。お前さんがどこからやってきて、どうやって歩いて来たのか。自分の足跡

をひとつづつ辿れば、次の一歩が、ちゃあんと見つかる。

ともえ おばあちゃま。

盛 見てごらん。グランパ達と一緒になら、なんだって見えるさ。過去

も未来も思いのままだ。鼓動を鳴らして、そうっと覗いて見てごらん？

ともえ 闇。・・・火星！？。月。地球。それから・・・、あれは、私？

鼓太郎 見えますか？そこはあなたの星の片隅の、小さな町です。さあ、

どうかこの宇宙服を！（ともえにランドセルを渡す）どこまでも飛んで参りましょう。

明転。遠い日のピアノの音が溢れだし、思い出の奥から次々と人々が現れる。

1-2-1 東京の空

ともえは、東京の空を見上げている。まるで空の中にも見える。

町の人々や、この家で暮らした人々が見える、人々は、暮らしながら、仕事をしながら、晴れ渡る東京の大空を見上げている。（全ての登場人物が舞台上に現れ行き交う）ともえ 「いつだったか、こんな空を見たことがある」と思う時がある、

す。知らない街の路地裏で、昔の歌を聞いたとき。私のこの目は、私の生まれるずっと前、どこでどんな空を見ていたのでしようか。

和子 夕焼け、朝焼け、真昼の青空。稲妻、三日月、流れ星。

美代 白く瞬く冬の雪。雨降る夏の緑色。春の夜風の桃色は、秋には真

っ赤な雲を運んで。

りつ 夕焼け色の帰り道。人恋しくて、丘の上から町見下ろせば、そこかしこの台所から、夕餉の支度の白い煙が無数に天に昇ってゆきます。

ハル 私のこの目は、お母さんに貰った目、おばあちゃんに貰った目。

おばあちゃんのお母さんの、そのまたお母さんに貰った目。そう思えば、何を見たって勇気が出るさ、と、白粉はたいて、笑顔作って夜空を見れば、月を横切る宇宙船。

和子 火星、金星、木星、土星。瞬きすれば、月にかかる七色の虹。

りつ 今、この街角にも、虹の光がまあるく伸びて。

貴子 「いつだったか、こんな空を見たことがある」と思う時
があります。雑踏の中、この青い星の片隅の、東京の空
の下で。

人びとが暮らし仕事する中で、家具にかけられていた白い布も全てなくなり、在りし
日のこの家と町の姿が、艶やかに蘇る。明転。

1-2-2 四月の夕暮れ時

昭和三十三年（1958年）、四月十一日。金曜日。夕方。鼓太郎と、小学生の
ともえが、家の中でかくれんぼをしている。

鼓太郎（声） もういいかい？

ともえ（声） まあただだよー。

鼓太郎（声） もういいかい？

7才のともえ、廊下の奥から走り出るように登場。赤いランドセルをしょっている。

ともえ ……。（部屋を見渡し、隠れる場所を探す）

鼓太郎（声） もういいかい？！

ともえ、ついに隠れるところを探し、庭に物陰をみつけ潜む。

ともえ（声） ……もういいよー！

鼓太郎、ともえを追って、おなじ部屋にやってくる。部屋から広縁に出る。

鼓太郎 ……っ！

物陰から赤いランドセルがはみ出しているの、あつという間にももえの場所がわか
つてしまい、鼓太郎思わず笑いをかみ殺す。「みつけた」とはスグ言わずに、鼓太
郎は、ともえの為に、わざと違う場所を探してみたり、難しそうに唸ったりして。

鼓太郎 うーん…。

ともえ（声） ……ここですよー。（小さく）

鼓太郎 や、この声は、いったいどこから？（わざと）

ともえ（声） くくく、ふふふ…。（声を押し殺して笑っている。）

はみ出した赤いランドセルが、笑いで小刻みに揺れている。と、和子（33才）と美
代（23才）が外から帰り廊下から広縁に。和子は和装の女中、美代は洋装の女中。

和子 だいま帰りましたー…。

鼓太郎 あ、おかえりなさい。

和子 あら？ともえちゃんは？

鼓太郎 あ、や。（ランドセルを、指さし。）

和子 おや。

赤いランドセル、ひよいと、引込む。

美代 （和子へ）あの、…本当にすみませんでした。

和子 え？

美代 ちゃんと地図まで持たせていただいたのに。

和子　　いいのいいの。住んでりゃ、そのうち慣れるわよ。
美代　　でも・・・。

和子　　（笑いながら鼓太郎に）びっくりしちやった、郵便局から電話があるから何かと思ったら、お宅の女中さんが道に迷って帰れずにいるから、迎えに来てくださいます。

鼓太郎　　おや、迷子でしたか。東京は広いからね。（冗談で）
和子　　切手の一枚もロクに買えないんじゃない、これからが大変だ。ハハハツ。

美代　　すみません、がんばって早く道を覚えますので。
　　もう隠れていられずに、ともえ、ひよっこり顔を出して。

ともえ　　切手なら、今度私が一緒に買いに行つたげる！

和子　　あら、ともえちゃんお帰りなさい。
ともえ　　郵便局に行く途中に、すごくいい駄菓子屋さんがあるの。美代ちゃんにも、こんど教えてあげるわ。

美代　　（照れ）はあ、ありがとう。

和子　　留守の間、何かありませんでした？

鼓太郎　　お勝手に、荷物が届きましたよ。尾道から、美代ちゃんに。

和子　　尾道？

美代　　母ちゃんだ・・・！送らなくていいって、あんなに言うたのに・・・。

鼓太郎　　こーんな大きな箱で。

美代　　すみません、たぶん、レモンか、野菜か・・・。

貴子　　貴子（31才）、二階から階段を降りてきて、女中を呼び。

貴子　　カズちゃん・・・！そろそろ山村先生がお帰りなるから、お茶の支度しておいて頂戴な。

和子　　はい、すぐ。お紅茶で？

貴子　　ええ、お願い。

和子　　はい。（美代に）何もぞもぞしてるの？

美代　　あの、お守りが見当たらず・・・。（籠の中をぞもぞ探している）

和子　　あるわよ、きつと。お勝手に探そう。ホラ。

美代　　はい。・・・くっしゅん！（くしゃみをして）

貴子　　（笑って）春が来たはずなのに、まだ冷えるねえ。

美代　　はあ・・・。

和子（声） 東京じゃね、4月に雪が降ることもあるのよ？

美代（声） まああ・・・！

和子、美代、お勝手の方に去る。貴子階段を上ろうとするが、ともえが呼びとめて。ママ。もう、幸子のところに行ってもいい？一緒に遊びたい。おはじきするの。

貴子 いけません、お病気が移るから。あのお部屋は入っちゃダメって言うてるでしょう？

ともえ もうコタジイと遊ぶの飽きちゃったよ。

貴子 そんなこと言わないの。鼓太郎さんに失礼でしょう？（鼓太郎に）すみません・・・。

ともえ だって。

貴子 幸子は今、お熱が出てすごく辛いんだよ？がんばってるの。あんたはお姉ちゃんなんだから、ちゃんとい子にしないさい。

ともえ 今日は、お風呂に行く前に一緒にシャボン玉してくれるって約束したじゃない。

貴子 え。そうだっけ・・・？ごめんなさい。また、今度ね。

貴子、再び階段を上ってゆく。

ともえ ママ、あのね、美代ちゃんのお家からレモンが届いたんだって！いーっぱい！（気を引こうとして）

貴子（声） そう・・・。

貴子、階段上に退場。

ともえ ……。

鼓太郎 ともえちゃん、じゃ、何かお話をしてさしあげましょうか？昔話。

ともえ どんなお話？

鼓太郎 そうですねえ。じゃ、今日は、むかーしむかし、このじいじが炭鉱町で活躍していた頃のお話にしましょうか？

ともえ ★それはもう沢山聞いたよう・・・。（ぼそぼそと）

鼓太郎 ☆（講談調で）時は明治45年、常磐炭鉱一の強者と呼ばれた二瓶鼓太郎は、親分たるもの、同じヤマの仲間には命にかけて守るべしと、一酸化炭素ガス充滿する、深く暗い穴の中、禰ひとつでまっしぐら・・・！

ともえ フンドシの話なんて嫌。もっとお姫様とか、王子様が出てくるお話がいい。

鼓太郎　じゃあ、・・竹取物語を。絵本、とつてきましようね。
ともえ　嫌よ、そんなのお姫様じゃない。プリンセスがいい。

鼓太郎　プリン？

ともえ　プリンセスって、英語でお姫様のことなんだって。グ
ランパが教えてくれたの。

鼓太郎　はあ、私は英語はからつきし。漢字もよう読めません
もので・・。

ともえ　これからは英語が大事なんだって。私、最近こっそり
お勉強してるの。

鼓太郎　勤勉でご立派。それでこそ大和撫子です。

ともえ　（言葉に振りをつけながら）ハロー！ソーリ！アイラ
ブユー！コーラ、キャラメル、チョコレート！

鼓太郎　（拍手）よっ、日本一！

1-2-3 レモンティー

階段上から、貴子、医者 of 山村昭三（37才）、降りてくる。山村は白衣を着ており、
手には、お医者 of 鞆を持っている。

貴子　本当にありがとうございます。今、お茶を。・・お勝
手見てきてくださいますか？

鼓太郎　はい。

山村　いいいえ、お気遣いなく。

鼓太郎、台所の方へ退場。ともえ、鼓太郎についてお勝手に行こうとしたり、とこと
こ歩き回って落ち着きがない。

貴子　お時間ありませんの？

山村　や、ま、

貴子　父もそろそろ帰るころですし、喜びますから。

山村　ああ。じゃ・・、今日はこちらで往診も終わりですし、
少し。

貴子　そうしていただかなくちゃ。

ともえ　山村先生、こんばんは。

山村　ともえちゃん、どう。学校は楽しいかい？

ともえ　はい。

山村　似合うね、それ。（と、ランドセルを背負う動き）

貴子　帰ってきていつまでもしよってもしようがないでし
よう？お家の中では、下したら？

ともえ　やだ。気に入ってるんだもん。

貴子　親に向かって口答えするんじゃないや。

ともえ

・・・

山村 そんなに気に入ってるんじゃ、お父さんもずいぶん鼻
が高いだろうね？喜んでるだろう？

ともえ

パパじゃないの。グラampaが買ってくれたんです。

山村

ああ、・・・いいねえ。

貴子

やだわ、お恥ずかしい。オホホ。

和子、美代、

紅茶の載った盆を持って登場。配膳しながら。

和子

どうぞ・・・

貴子

ありがとう。

山村

あ、これはいい香りだ・・・

和子

レモン・ティーでございます。美代ちゃんの田舎から、
沢山おレモンをいただきます。

貴子

まあそう。お母さまに、お礼状出さないとね。

美代

(恐縮して首を横にふり) そんな・・・

山村

田舎は、どちらですか？

美代

尾道です。父が、果樹園を。

山村

やあ、いいなあ。

美代

ともえちゃんには、これ。

ともえ

え？

美代

レモン水。レモンの果汁を絞って、ハチミツとお砂糖

山村

溶かしたの。

山村

あ、それはいいや。そこらで売ってる粉ジュースなん
かより、よっぽど身体に良いですよ。ビタミンC！

ともえ

(一口飲み) 美味しい・・・

山村

お子さんには、どんどん飲ませた方がいい。やあ、い
いなあ。

和子

あら、先生もレモン水の方が良かったですか？

山村

いやいや。

貴子

最近は、ねえやを探しても、なかなかいいコが見つか
らなくて。母が色々とツテを辿ってね、やっと美代ち
ゃんを見つけてきてくれた。

山村

ああ、今時の若いお嬢さん達は、働くっていうと、皆
バスガールになりたがるそうですね。

貴子

そう・・・バスに乗ったからって、お嫁に行くとき何
の役に立つんでしょね。

和子、美代、お勝手に去ろうとする。

貴子 カズちゃん、美代ちゃん、ちよつといい？

お勝手に去ろうとしていた女中達、立ち止まり。

貴子 ともえは、ちよつとあつちに行つてなさい。

ともえ どうして？

貴子 先生と、大事なお話するから。

ともえ また、幸子の話？

貴子 いいから、あつちに行つてなさい。

鼓太郎 一緒にお二階で絵本を読みましようか？ね。

ともえ ……

ともえ、ぐつと齒を噛み締めていたが、弾かれたように勢いよく二階に駆け上がった。鼓太郎も、ともえのあとを追つて、早歩きで二階にあがる。

貴子 ともえ！お家の中、走らないの！…すみません。

山村 いえいえ。

貴子 あの、さきほどのお話なんですけど。

山村 まあ…、風邪を長くこじらせたのがね、一番よくなかつたんだと思うんですが、幸子ちゃんは、もともと少々、喘息の気があつたでしょう？それがやつぱり、でもあの子、あんなに咳が長引くのは初めてで。まさか、…結核じゃないですよ？

山村 しばらく様子を見て、ご心配なようでしたら一度レントゲンを。いずれにせよ、もし小児喘息ということになれば、それも用心しなければいけませんし。

貴子 ええ。

山村 このあたりも一歩大通りに出たら、バスだ車だオートバイだつて、もうバンバン走つてるでしょう？アレルギーの問題なんだつていう学者もいますけどね、僕はやつぱり、排気ガスというヤツに関係ある気がしてならないんです。

貴子 あの子は…、ちゃんと大きくなれるんでしょうか。

山村 もちろんですよ。

貴子 桜の花も咲きだしたつて言うのに、なぜあの子だけがこんな目にとと思うと、本当に不憫で…。

山村 どうか、気を落とさずに。

和子 私、うんと栄養つくように、お台所でがんばります。

貴子 ありがとう。

松島竹雄（42才）、佐々木肇（25才）、木村 清（40才）、が帰宅する。佐々

木「絶対、オカズがおかしいんですよ。」竹男「そんなことあるかなあ？」

などと言いながら、ドヤドヤと帰宅して廊下から共有の居間に入ってくる。

和子 ★おかえりなさいまし。

美代 ☆おかえりなさいませ。

貴子 ☆お疲れさまでした。

松島 ああ、山村先生。ご苦労様です。

山村 どうも。

佐々木 こんにちは。

木村 お、あ・・・。（山村に、満面の笑顔で丁寧に会釈をする）

松島 もうすぐ親父さんも戻りますので。先生、また、コレでしょ？ね。

ハハハツ。（と、ジエスチャーでお酒を飲むしぐさ）

山村 いやいや、そんなつもりで来たんじゃないよ。

各自話しながら、事務机の上に置いてあるお盆に、空になった弁当箱や水筒を返

却する。松島は、ちゃぶ台のお茶場で湯呑に水を注ぐと、煙草を吸おうと広縁へ。

佐々木 あ、ねえカズちゃん！・・・ほんとにさあ、どうして僕の弁当だけ

オカズがいつも一品少ないのさ。

松島 おやめなさいって。出されたものを、美味しく食べたらいいじゃ

ない。（和子に）ねえ？

佐々木 え、木村さんの弁当は、今日のオカズなんでした？

松島 佐々木君。（いなして）

佐々木 だって、

木村 鮭（シヤケ）、お新香（オシンコ）、きんぴら、豆、・・以上。

木村、言いながらずんずんと広縁から2階に上がって行ってしまふ。

佐々木 あ、やっぱり。ねえ、カズちゃん、僕、豆、入ってなかったよ。

和子 新人の方はまだ半人前なので、わざと一品減らしてるんですよ。

松島 えええ、そうだったの？（ひどく驚いて）

佐々木 じゃあ何年たったら、増えるのさ。

和子 いえ、年数じゃございません。こちらのタケちゃんがこの会社に

来た時なんて、志が良かったですから、最初から大盛でオカズが

ぎっしりでしたもの。ね？

松島 え？俺？そうだったかなあ・・？

佐々木 解せないなあ・・。

和子、美代、弁当箱と水筒を回収してお勝手に運んでゆく。

佐々木 志・・。松島さん、教えてください。

松島 親父さんのとこに行かなくていいのかい？

佐々木 あ。．．あ！

加納 盛(55才)、加納りつ(49才)、登場。少し離れて、小林勇が廊下にいる。

盛はストラックスとベストに春のコート、ネクタイと帽子で上質な洋装姿、りつは和装。

盛 帰ったぞ。

和子 ★①おかえりなさいませ。

美代 ☆①おかえりなさいませ。

貴子 お父さん、お母さん、今日もお疲れさまでした。

りつ ★②ただいま。

盛 ☆②うん。．．ああ、山村先生。どうも往診ご苦労様です。

山村 はあ、どうも。

盛 おい、佐々木。(笑いながら鞆を差し出す)

佐々木 あのっ、．．申し訳ありません。(駆け寄ってすぐ受け取り)

盛 ばかもん。鞆持ちが鞆より先に帰るなんて話があるか。

佐々木 親父さん、すみません。

盛 カズちゃん、今日は先生がいらっしやるから、晩酌のお銚子、一

本多くつけてくれ。

和子 はい。

盛 (山村に) 一杯やりましょう。

山村 や、まいったな、これは。

盛 (二階や奥のお勝手に届くような大声で) オーイ！紹介する人が

いるから、みんな集まれ。．．貴子、なんだ、元気がないな？

貴子 いえ、そんなこと。．．

りつ ともえちゃんは？次郎さんはまだ帰らないの？

貴子 あの人は遅くなるみたいで。ともえは二階に。今、呼んできます。

りつ 貴子、階段を上り、2階の方へ退場。

りつ (貴子の背中に) 幸子の様子はどうなの？．．先生、よろしくお

頼み申しますよ？

山村 や、もちろんそれは。はい。

盛 オイ、．．どうした、小林君。そんなとこに立って居ないで、遠慮

せずに、さ、こちらへ。

小林 勇(32才)、居間に現れる。二階に居た面々も、幸子以外は全員降りてくる。

全員視線が小林に集まる。小林は簡単な旅支度で、今朝東京に着いたばかりの様子。

小林 ．．．。(みんなの顔を見回して、ペコリとひとつお辞儀をする)

盛 今日からしばらく、二階の部屋に下宿してもらおうことになった。

小林君だよ。

小林 信州は上田市から参りました、小林勇と申します。別所温泉で産

湯を使い、生まれ故郷で、先祖代々鳶職をやっております。ふつ、ふかつ、ふふつかつ、不束者ながら、よろしくお願い申し上げます。

盛 おい、君、少し肩の力を抜き給え。

小林 はあ、すみません。

盛 小林君は、私が学生時代にお世話になった恩師の、奥様の、弟さんの、ご子息である。今度、港区に建設中の日本電波塔の工事に参加するために、はるばる上京なされた。命を懸けて、日本再建に参加する男だぞ。みんな大事にするように。

一同、嬉しそうに顔を見合わせたりしながら、拍手で答える。

小林 いえ、そこまで言っていたくわけには・・・。

りつ ホントは、あっちの新しい独身寮の方にお部屋を用意したかったんだけど・・・、母屋ですみませんね。

小林 いえ、社長さんと同じ屋根の下で、むしろ光栄です。

盛 君、親父さんでいいよ。ここにいる間は息子になったつもりで、困ったことがあれば何でも言いなさい。

小林 ・・・・。(ペコリとひとつお辞儀をする)

盛 佐々木。(そばに呼んで)

佐々木 は、はい！

盛 これはうちの、一番若いエンジニアでね。君の隣の部屋だ。(佐々木に)同じものづくりの人間として、志を盗ませてもらいなさい。

佐々木 ・・・・。(ペコリとひとつお辞儀をする)

小林 や、こちらこそよろしく。(ペコリとひとつお辞儀をする)

盛 下宿のことは、その松島に聞くといい。

松島と小林も、お辞儀しあう。

鼓太郎 東京見物のことなら私に聞いてください！銀座でも、浅草でも！

一同、おおいに笑う。

盛 今日小林君が来たから、晩酌のお銚子、もう一本！

和子 はい・・・合計二本追加。

盛 今夜は宴会するぞ。あとでみんな、奥の私のとこに来なさい。好きなだけ飲むといい。

松島 よっ、親父さん、日本一！

盛 じゃ、解散。

一同、動き出し、移動したりしながら話す。木村は、小林を捕まえ熱い握手を交わす。

ともえ 日本電波塔ってなあに？

貴子 お二階の窓から見ると、組み立て中の赤い塔が見えるでしょう？

空に向かつてこうポツーンと。

ともえ

ああ・・！★

貴子 あれが出来上がると、もつとテレビが見られるようになるのよ？

和子 ☆先生、じゃ、先に奥の間の方へ。

山村 あ、やあこれはどうも。ちよつと一服してからでもいいかな？

和子 はい。

盛 ☆ええと、あー、君は・・、

美代 美代でございます。

盛 そう、美代ちゃん。長旅でお疲れだから、タライにお湯を作つて

さしあげなさい。

美代 はい。

盛 奥の水場で足を洗ってもらいなさい。そしたら今夜は歓迎のお祝

いだ。君、飲めるんだろ？

小林 はい。ありがとうございます。(ペコリをお辞儀をする)

美代 どうぞ、こちらです・・。(小林の荷物を持ち)

小林 いえ、そんな。自分で。(婦人に持たせるなんて、という風に)

美代、小林を、お勝手の方向に案内しながら退場。山村、広縁でたばこを吸っている。

盛 先生、じゃちよつと着替えてまいりますので、失礼。

山村 やあ、お気づかいなく。

盛とりつ、奥に退場。貴子、ともえは、二階に退場。下宿人達も二階に退場。

山村、ひとりたばこを吸っていたが、それをもみ消すとお勝手のある方に退場。

誰もいなくなる。そこに、高杉次郎と水野ハルとがやってくる。水野ハルは、水商売風の色の濃い華やかで裾の長いワンピースを着ていて、手にハンドバックをぶらさげている。口紅も濃いのだが、ズベではなく、どこかエレガントな佇まいを持っている。

次郎は、スーツにソフト帽子の姿で、ほろ酔いの様子。次郎だけ先に入り。

次郎 帰つたぞ・・。オーイ！誰も居ないのか？なんだまったく。主人を出迎えもしないで。

ハル ねえ、高杉さん。私やっぱり、帰るわよ。

次郎 どうして？構わないよ、さ。(もつと中に来るよう、促して)

ハル なんだかお門違いな気がしてさ。

次郎 そんなことはない。私の気持ちは、いたって真剣なんだから。

ハル はあ・・。

次郎 僕は本気だ。

ハル ええ。

水野ハル、次郎のあとに続いて廊下を歩き、室内を見回す。

次郎 どうだろう？そこに、洋間もあるんだよ？レコードもかけられる。

ここなら、思う存分出来るだろう？

そうねえ、このくらい広ければなんとか。

じゃ、考えてくれるね？

ごめんなさい。でも私、今日はやっぱりお店に戻らなきゃ。

おい、待ちなさい。少しかだけ教えてくれないか？やはり、体のこととは実際にやるまではわからん。せめて、形だけでも確認したいんだ。

え？

次郎 本気になったら、毎日しないと、気が収まらんたちでね。

ハル そう言われましても・・・。

次郎、バツっと、ハルを引き寄せ、社交ダンスの形式で手を取り向かい合う。

ハル ひやつ！！

次郎 どうでしょうか？タンゴは、この姿勢であっていますか？

ハル ・・はい。

貴子と、ともえ、銭湯に行く支度で階段から降りてきて、二人を発見し。

貴子 あなた？！

次郎 あ。

ハル あの、すみません。さよならっ・・・！

ハル、ぴゅーっと逃げ帰ってしまう。

ともえ お父さん、お帰りなさい。(しっかりと頭を下げて)

次郎 うん。ただいま。

貴子 お帰りなさいませ。・・あの。今の方、いったいどなた？

次郎 や、違うんだ。お前の考えてるようなことじゃないよ。

貴子 そうですか。

次郎 ・・オイ！なんだ、出迎えもしなかったくせに！

貴子 お二階と下とじゃ、遠くでお声が聞こえない時があるんですもの。

仕方がないじゃないの。

次郎 なにいい！・・うぬう。(手を上げかけるが、ぐっところえ)

貴子 さ、ともえ。お風呂行ってきましょう。

次郎 オイ、待ちなさい、貴子。

次郎、貴子を追うとその手首を掴み。

次郎 「仕方ないじゃないの」とは何様だ！口答えをするな。

貴子 ごめんなさい・・・。

次郎 だいたい、夫の声が聞こえないだと？遠いくらいなんだ。お前は、

それでも俺の妻か！

貴子 遠いくらいって・・・、距離っていうのは尺の問題でしょう？志の

問題じゃありませんもの。

次郎 屁理屈を言うな！

ともえ ママ、算数の時間にね、尺じゃなくて、メートルを使えって先生が言ってたよ？

次郎 物理でも科学でも証明できないことだってある。夫婦なら、聞こえる時には聞こえるっ！！

貴子 あなた・・・！（指の形で、しーっと、静かにする合図）

次郎 なんだ？・・・これは？（とジェスチャーを真似て）

貴子 他の方に聞こえますから、声を落として。今日は、父の大事なお客様もおいでなんですから。

次郎 ふん・・・。

次郎、手を放し離れ、座卓のそばに座る。

貴子 すみませんけど、お先に、お風呂を浴びてきます。ともえを、夜更かしさせるわけにいきませんから。

次郎 ……ああ。

ともえ パパ。今日ね、ともえ、レモン水を飲んだんだよ。

次郎 そうか。良かったじゃないか。

ともえ うん。いつてきます。

次郎 いつてらっしゃい・・・。

貴子 ……（次郎に頭を下げ、ともえの手を引き、玄関の方へ）

貴子、ともえ、退場。次郎、ひとり残って、居間のラジオをかける。タンゴのラ・クンパルシータが流れてくる。

次郎 ……。

次郎、細くため息をつくど、広縁に腰をかけて、煙草をとりだし、マッチを擦って煙草に火をつける。暗転。

2-1-1 五月の夜と英語のノート

昭和三十三年（1958年）五月十六日。金曜日。夜。ともえが、パジャマにカーディガンを羽織って腹巻をした姿で、机に向かい英語の勉強をしている。ともえは、音読し、また、ノートに鉛筆で綴り。

ともえ ハロー、ソーリー、アイラブユー。コーラ、キャラメル、チョコレート。グツバイ、グツナイ、ドロップス。（ここからは、悩みつつ書き足して）ビスケット、ポップコーン、ホットケーキ、・・・、あ、ファ・ン・タ・・・・！ふう。

ともえ、少し眠くなってきて、うつらうつらと、船をこぎだす。と、洗面器とタオルを持った貴子が、お勝手の方向からやってきて、ともえに気づき。

貴子 ……ともえ・・・？！

ともえ あ、ママ！ねえ、まだ寝ないの？

貴子 何やってるの？

ともえ お勉強。えらいでしょ？

貴子 先に寝てなさいって言ったでしょう？

ともえ だって・・・。

貴子 ちゃんと寝なさい！

貴子、二階に登ってゆく。ともえ、ノートの間からそつと幸子への手紙を取り出し。

ともえ

さちこへ。おねえちゃんは、きょう、おやつにホットケーキを食べました。さちこは食堂におりて来なかったの、さちこの分もぜんぶたべました。おやつを食べるとき、コタジイから、さちこが生まれた時のお話を聞きました。幸子が生まれて、オサンバさんが、「元気な女の子ですよ！」と言ったとき、となりの部屋にいたパパは、「なんだ、また女か・・・。」と言ったそうです。きょうのお手紙は、これでおしまいです。ともえより。

ともえ、音読確認を終え、満足気に眺め四つに畳む。お勝手の方から水差しとコップの載った盆を持った和子が登場していて、広縁にいてもえを見つめ微笑んでいる。

ともえ ・・カズちゃん！

和子 どうしたの？眠れなくなっちゃった？

ともえ 私、幸子にお手紙書いたの。届けてくれますか？

和子 お見舞いのお手紙ですか？優しいお姉ちゃんだこと。じゃ、私がお預かりしましょうね。

ともえ ありがとう。

和子、ともえから手紙をうけとり着物にしまう。銭湯帰りの美代が、広縁に登場する。

美代 ただいま帰りました・・・。

和子 おかえり。美代ちゃんちよつと悪いんだけど、ともえちゃんのこと、お願い。

美代 はい。

和子 私、ちよつとお二階のお手伝いを。幸子ちゃんの。

美代 はい、わかりました。

和子、階段を上り、二階へ去る。

ともえ ・・・・。

美代 じゃ、一緒にお部屋に戻りましょうか？いつまでもお布団に入らないでいると、風邪ひいちゃうよ？

ともえ いいの。ママが寝るときに一緒に寝る。

美代 そう・・・。

ともえ まだお勉強があるから。

美代

美代 おやまあ、えらいね。

ともえ 先生に花丸をいただと、ママ、とっても嬉しそうに笑ってくれるのよ？だから私、ノートを花丸でいっぱいにするの。

美代 そう・・・今夜は何の科目なの？

ともえ 英語。まだ学校では誰もやっていないの。私の個人研究。

美代 まあ、凄い・・・見てもいい？

ともえ ・・・（はにかみながらも、元気に頷き）

美代 おやまあ、これは・・・なんとも、美味しそうな・・・

ともえ うふふ。

美代 ノートを熱心に見ている。そばでここにこしていたともえは、目をしばつかせながら、またうつらうつらとしだし、そのまま寝てしまう。

美代 ともえちゃん・・・？

ともえ ・・・。（すーすーと寝息をたてている）

そこに、風呂帰りの松島、佐々木、小林、木村、がわらわらと帰宅する。木村、松島、佐々木の三人は、瓶入りのファンタを飲んでいる。佐々木、「や、相撲だけじゃないですよ？ホラ、野球だって、本物を球場で見たことがあるかないかで、テレビの見え方が全然違うわけで・・・！」と自説を力説している。松島だけが、ああ、だの、うん、だの相槌を入れている。

美代 しー・・・！（ともえを起こさないように、と。）

松島 ありやりや。

佐々木 え？・・・どうしてここで寝てるの？（ともえを指して）

木村 はっはっはっ・・・！

美代 すみません。貴子様が寝るまで寝ないって言って、ここで勉強してたんですけど。

松島 でも、寝ちやつてるよなあ。

木村 はっはっはっ・・・！（笑いながら、二階を目指し）

佐々木 木村さん、しーっ・・・。

木村 ま、子供は寝るのが仕事みたいなもんだからなあ・・・。

木村、言いながらずんずんと2階に上がってゆく。小林も、ペコリとお辞儀をして、木村の後を追って二階に行く。松島は、煙草を吸おうと広縁にいる。佐々木は、ともえの英語のノートを見て。

佐々木 （ノートを見て）コーラ、キャラメル、チョコレート？

美代 英語の研究ですって。こういう言葉は、子供でもすぐに覚えちゃうんですねえ。

松島 はははっ。（愉快そうに笑って）

佐々木 甘いものって、すごいなあ。

松島 え？

佐々木 や、正月に実家に戻ったときにね、親戚のおばちゃんとか子供にせがまれて、仕事のことを説明しようとしたんですけど、やっぱり、造船所のボイラー作ったとか、米軍キャンプの暖房設備を作ったとかって言っても、あんまりピンと来てくれなくて・・・
まあ、なあ。

佐々木 それがね、角砂糖の工場の設備の話とか、カルピスの工場に行つた時の話なんかすると、急に眼をキラキラさせて、あらまあ、カルピス？肇君は立派になったのねえって。

小林、手に何か包みをもっておりてくる。居間にまだ佐々木と松島が居るのを見て。
あ・・・

松島 どうしたの？

小林 あ、や。あの、ちよつと・・・

小林、いそいそと通過し、奥の部屋に向かう廊下の方へ退場する。

佐々木 小林君とかはなあ・・・

松島 ン？

佐々木 や、そりや小林君みたいにね、日本電波塔とかやってね。鳶やつて、今、あの赤い塔を作ってます、なんて指さして言えたら、子供にだってわかりやすいかもしれないですけど。

松島 ああ、そうね。

佐々木 すみません・・・、たいした話じゃなかったですね。

松島 いやいや。

佐々木 すみません。僕、いつつもたいした話ができなくて・・・

松島 や、でもさ、親父さんがいつも言うだろう？俺たちは、ネジひとつ締めるにしたって、この国を作ってるんだよって。だから、配管つなぐ一手だって、髪の毛一本分でもずれたらいけないって。
・・・

佐々木 暮らしてて、目に見えないところだとしてもさ・・・。そうだよ、佐々木君！日本を、作ってるんです。僕たちは。
・・・

佐々木 ううん・・・。(もにやもにや言ってる)

松島 ファンタ、ご馳走さま。お代は、明日必ずお返しするから。

佐々木 あ、いいんですよ、このくらい。ご馳走させてください。
いえ。

美代 瓶、片づけておきましようか？

佐々木 ★あ、ありがと。(美代に)

松島 ☆いえいえ、このくらいは自分で。

佐々木 あ、じゃ自分も・・・、

松島、佐々木、お相手の方向に退場。美代、灰皿などを片付ける。小林が戻って来る。

美代 ……

小林 あの、君。

美代 はい。

小林 これを・・・。(と、包みをさしだす)

美代 なんでしょうか？

小林 手ぬぐいです。趣味に合うかわからないけど。

美代 え？私にですか？

小林 この家に初めて来た日。君に、足を洗ってもらったでしょう。

美代 ああ・・・。

小林 君のてぬぐい、汚してしまったから。

美代 あら、いいんですよ。長旅でお疲れだったんですもの。足が汚れるのは当然ですもの。

小林 ……。(黙って、ぐいと差し出す)

美代 はあ・・・。(受け取り) ありがとうございます。

小林 じゃ・・・、明日も早いので。

美代 ええ。おやすみなさいませ。

小林、自分の部屋の方に去りかけるが、のこのこと戻って来る。

小林 あの。

美代 はい。

小林 君の田舎では、レモンを作っているそうですね。

美代 ああ、ええ。

小林 僕もね。家は鳶職だけど、母方は農家だね。林檎を作っているんです。

美代 まあ、そうでしたか。

小林 うん。

美代 きつと、里のお父様も、お母様も、ご自慢でしょうね。

小林 え？

美代 あの赤い塔は、世界で一番高い電波塔になるのでしょうか？旦那様がおっしゃっていました。

小林 ああ。

美代 故郷に錦を飾るって、こういうことを言うんですね。跡取り息子が、東京で世界一のお仕事をしているんですもの。

小林 や。僕、次男なんです。

小林

美代

小林

小林

小林

美代 あ・・・

小林 父の会社は、兄貴が継ぐことが決まってるね。

美代 あら、ごめんなさい。私失礼なことを。

小林 いやいや。

美代 すみません。

小林 君は？兄弟は？

美代 姉と、妹が。

小林 三姉妹なんですか？

美代 ええ。

小林 そうですか！

美代 上の姉が、千代。私が美代で、下が紗代というもので、近所では、

小林 よよよ三姉妹って、呼ばれてて。おかしいでしょ？

美代 ハハッ、面白いな。うちもね、三兄弟なんですよ。

小林 まあ、本当に？！

美代 ええ。一番下の弟はなかなか勉強のできるやつで、せつかく大学

小林 まで出たっていうのに、ロカビリーをやるって言いだしてね。今

美代 も、なんだかがんばっていますよ。

小林 わあ。じゃ、いつかレコードが出ますわね！

美代 うーん、どうかなあ。

美代 うふふ。

小林 二人、少し笑いあい。

美代 や・・・すみません、なんだか立ち話を。

小林 いえ、そんな。

美代 あ。立ってるのは、僕だけですわね。何言ってるんだ、俺。

小林 あ！すみません。（反射的につい、立ち上がる）

美代 あ！いやいや、そんな、そういう意味じゃ。どうか、座ってください。

小林 さい。あ・・・

2-1-2 手紙と、癩癩。

二階から、どかどかと、次郎が降りてくる。貴子、和子、が、その後を急いで追ってついてくる。貴子、「あなた、ねえ、ちょっと待ってください！」と言いながら。

次郎は、手にもえが幸子に書いた手紙を持っている。

次郎 ともえは？

美代 え？あ・・・あのこちらに。

次郎 ・・・・オイ、起きろ！

ともえ ・・・・ん。（声に目を覚まして）

貴子 あなた、お願いだからよして頂戴。（次郎の腕にすがって）

次郎 (貴子を乱暴に振り切つて進み) 起きなさい、ばかもん!

次郎、ともえのそばに行く腕をとり、起こす。

ともえ パパ・・・?

次郎、ともえの頬をパンと平手で打つ。美代、「キヤツ」と悲鳴をあげ顔を覆う。打たれたともえ、ペチャンとへたり込む。美代、小林、動けずにいる。

ともえ ……。

次郎 なんだ、この手紙は!これが、苦しんでいる妹に送る言葉か!

ともえ ……。(何が起こったのやら、よくわからない。)

貴子 仕方ありませんよ。まだ、読み書きを覚えはじめたばかりなんだから。

次郎 言葉を知ってる知らないの問題じゃない!おい、お前だったら、

これをもらつて嬉しいか?幸子のホットケーキを全部食べた

と?あいつはな、泣いていたぞ?病気の妹を泣かせて楽しいか!

・・パパ、ごめんなさい。

次郎 謝るなら、幸子に謝れ!(幸子の部屋の方を指さし)

・・…。(ふらふらと立ち上がる)

貴子 あなた駄目よ、幸子の部屋に行ったらうつるから。ともえ、幸子

のとは行つちやダメ!!

ともえ ……。(へにやへにやとしゃがみこむ)

次郎 自分自身の力でケジメをつけるということを、小さい時から覚え

させなきゃダメだ!いくら女だと言っても、そこを甘えていたん

じゃ自立はできません。これからの時代、やっつけていけん。

貴子 え・・・?女は甘えてるって、あなたはおっしゃるんですか?!

次郎 そんなことはひとつも言っていないだろう?!

ともえ パパ、ママ、ごめんなさい・・・。ケンカしないで。

佐々木と松島が、台所から戻ってきて通過しようとするが、この様子に立ち往生し。

次郎 ともえ、ホラ立て!ちゃんと幸子のところに行つて謝れ!

あの、お願いですから、

次郎 女中は黙つてろ!

そんなこととして、ともえまで結核になったらどうするんですか!

え・・・?どういうことだ。オイ!

貴子 ……。(泣き出すのを気丈に堪えて、言葉を失くし)

和子 いえ。まだ、そうと決まったわけじゃございませんよ?ただ、レ

ントゲンを撮りに行つただけで、あの、山村先生がこないだ、

次郎 幸子、レントゲン撮ったのか?

和子 ええ。

次郎 聞いてないぞ?!

貴子 こないだの晩、言いましたよ。でも、・・あなた、ずいぶん飲んで帰ってこられたから。(貴子、ついに涙を耐え難くなり)・・すみませんっ。

貴子、早足で階段を上り、二階の幸子の部屋に向かう。

松島 ・・。(全て自分が悪かったような顔で、そうつと通る)

佐々木 ・・おやすみなさい。(だいぶ小さな声で)

松島 佐々木は、その場を去り二階に退場するが、小林と美代はまだ動けずにいる。
ともえ パパ・・。(目をこすつて必死に眠気を覚まし、正座して)

次郎 なんだ?

ともえ わたし、幸子のお部屋に行かずに、ちゃんと謝ります。そしたら、
パパも、ママも、悲しくないでしょ?

次郎 何?

ともえ お手紙を、書きなおします。ごめんなさいのお手紙を書いて、カズちゃんに届けてもらいます。だから、・・おやすみなさい。

次郎 お前は・・なんて、聡明な子なんだ。オイ、この子は天才だぞ。

お聞きになりましたか?

小林 あ、はい。ええ。

和子 あの、ともえちゃんは私が寝かしますから、どうか、旦那様も少しお休みになってください。毎日遅くまでお仕事なんですもの。
きつと、お疲れなんですよ。

次郎 私のなんぞ、忙しい内には入らないよ。馬鹿にするな。

和子 でも、・・じゃ、何かお飲み物、ご用意しましょうか?

次郎 や。少し、夜風に当たって来るよ。(小林の方を向き)お騒がせして、すまなかった。

次郎、小林にすつと頭を下げ、家の外に退場。

和子 すみません。驚きましたでしょう?

小林 いえ、そんな。

和子 美代ちゃん、もう先に休んでいいわよ。あとは、私が。

美代 すみません、おやすみなさい。(小林に)あの、これありがとうございます。ご
ざいました。

和子 ・・。(何かしら?と手ぬぐいの包みが気になる)

小林 あ、いや。おやすみなさい。

小林は二階へ、美代は女中部屋のあるお勝手の方へと、それぞれ別の方向へ退場する。

和子 ともえちゃん?お部屋に戻ろうか?

ともえ ううん、私、ごめんなさいのお手紙を書かなきゃ。

和子 明日にしたら？

ノートのページを一枚やぶるが、大失敗して、おかしなちぎれ方になってしまう。

ともえ あっ！

和子 あらっ。

引き続き次々と何枚か破るが、ことごとく失敗する。

ともえ ・っ・っ・っ・っ・っ。

ともえ、急に、めそめそと泣き出し。

和子 ともえちゃん？

ともえ さちこなんか、どっか行っちゃえ・！ひ、ひとさらいに、連れてかれちゃえ・！

和子 そんなこと言うもんじゃないよ？

ともえ、やおら和子にしがみつき泣き出す。

ともえ ・わたしは、貰い子なの？

和子 ええ？

お、お友達の正子ちゃんが転校する時、こっそり教えてくれたの。

「わたし、これから遠くの町に行つて、貰い子になるのよ」つて。

和子 そう・・。

正子ちゃん、いつもお昼、食べてなかったの。給食費を出してないからつて言つて。でも、もうお家に帰つても、御飯、食べられなくなつちやつたんだつて。――

和子 ・・・。

わたし、赤ちゃんの時に貰われてきたのかな？だから、ママはいつも怒つてるのかな？

和子 そんなことありません。私はね、ともえちゃんが生まれた日も、

幸子ちゃんが生まれた日も、このお家に居て、お産婆さんのお手伝いをさせてもらいました。どちらの日のことも、この目に、しっかり焼き付いていますよ。だから、間違いありません。

ともえ 本当？

和子 ええ。

ともえ 良かった・・。

和子 幸子ちゃんが生まれて、パパが「なんだ、また女か・・。」つて言つた時のこと、お手紙にあつたでしょう。

ともえ ええ。

和子 その後が、痛快でございましたよ？

ともえ え！なあに？

和子 お産婆さんが、こう、ガラツと襖を開けて、「お産は、女の命がけ

です。そんなこと、言うもんじゃございません！」ってピシヤリと。さすがの旦那様も、しよんぼりと、うなだれておりました。こんなになつて・・・(しよんぼりした姿を真似)

二人、少し笑いあう。

ともえ 「女の命がけ」ってなあに？

和子 さあ、なんだろうね？女もいっぱいいますから。きっと、その女

ごとの、命がけがあるんでしょう。私はね、そう思うのよ？

ともえ ・・よくわかんない。

和子 そうだね。うふふ。

ともえ カズちゃんのお膝、温かい。カズちゃんがママなら良かった。ホ

ットケーキも上手だし。

和子 ・・・。

和子、ともえの背中にそっと手を当てる。再び寝てしまふともえ。

2-1-3 月夜

同じ頃、道端。酩酊して帰路についている鼓太郎と、それを支えながら歩くハルの姿がある。鼓太郎は上機嫌で、酔いどれに唱歌の「冬の夜」を口ずさんでいる。

鼓太郎 ♪燈火ちかく衣(きぬ)縫う母はく春の遊びの楽しさ語る♪

ハル ねえ・・・本当にこっちの道でいいのね？

鼓太郎 や、ハルちゃん、あいすみません。じゃ、ここで、さいなら。私

は今からちよいと、吉原に行つてまいりますので。

ハル ちよつ、鼓太郎さん？

鼓太郎 吉原へ、いざ、出陣！

ハル ねえ。もう、あそこは無くなつちやつたのよ？

鼓太郎 じゃ、ちよつと新宿のカフェーに。聖母(マドンナ)を探しに。

ハル だから・・・、それも無くなつちやつたの。

鼓太郎 無くなつた？

ハル やあね。先月、お店と一緒に新聞読んだじゃないの。鼓太郎さん、

「赤線が無くなるなんて、淋しい法律が出来たもんだ」って、ご

自分で言つてたわよ？しつかりしてよ。

鼓太郎 つ・・・。(鼓太郎、突然、子供ように泣き出しかけて)

ハル え・・・。ちよつ、泣いてるの？！

鼓太郎 赤線の灯(ひ)が消えてから、月に一度の、ハルちゃんのお店だ

けが、僕の心の灯(ともしび)なんです！

ハル ちよつと、声が大きいつてば。

鼓太郎 安心の明朗会計。心の灯(ともしび)。バー灯(ともしび)。

ハル え？なあにそれは？・・・駄洒落？

鼓太郎 あなたのお店が潰れなくて、本当に良かった。

ハル あたりまえでしょ、うちはふつうのバーですもの。ウイスキーしか、売ってませんよ。

鼓太郎 ♪燈火ちかく衣縫う母は・・・春の遊びの楽しさ語る♪

ハル ね、とにかく玄関までお送りしますから、しっかりして？さ、歩ける？

鼓太郎 加納って表札まで、お願いいたしまアす。

ハル もう困っちゃうなあ・・・。

鼓太郎 ねえ、君。冥途の土産に、一度でいいから、僕のお母ちゃんになつてくれませんか？浅草寺の観音様より、僕はハルちゃんの白い乳房を拝みたい。(さっそく拝みだしてしまふ)

ハル もう、しよがないわねえ・・・。

鼓太郎 え？

ハル やあね、違うわよ！今、タクシーを拾いますから、やっぱり、車でお帰んなさい。ね。

鼓太郎 タクシー？！た、タクシーはいかんよ。神風タクシーなんぞにあ

ハル たったたら、ぶっ飛ばされてホントの冥途にひとつ飛びですから。

大丈夫よ。ほら、じゃ、ちよつとここで待っててね。(と、離れて)

鼓太郎 死ぬ。(と言つて、ふらりとよろめく)

ハル えっ・・・！アララ・・・。

鼓太郎 すみませんが、小生、先に床につかせていただきます。♪囲炉裏

火はとろとろ・・・外は吹雪♪

歌いながら、鼓太郎はしゃがみこんで地面に寝てしまふ。その体を支えようとしてハルも、「ちよつ、ととととと・・・」と、一緒に座りこんでしまふ。

ハル (細くため息をつき)・・・あ。ねえ、見て。今夜は、ずいぶん明るい月が出てる。この分だと、明日も晴れるねえ。

鼓太郎 ぐー・・・ぐー・・・。(すやすやと、膝に甘えて眠っている)

ハル さすがに見捨てて歩き出すわけにもいかず、ハルは、あきれつつも寝顔を見て笑い。ハル・・・いいよ。じゃ、タバコ一本分の間だけ、アンタのお母ちゃん

でいてあげる。

ハルは、眠って聞こえていない鼓太郎の耳にそう囁きかけ子供をあやすように鼓太郎に手を添えてやりながら、煙草に火をつける。

同じ頃、加納の家では、りつが、お盆に空のお銚子や小皿を載せて、台所に行こうと、奥から廊下を通ってやつてくる。ともえの寝顔を見守っていた和子を見つけ。

りつ ご苦労様。

和子 あ。(何か、手伝おうかと)

りつ 大丈夫よ。奥の晩酌も、もうおしまい。長火鉢の火も落としまし
たから。・・・貴子は？

和子 幸子ちゃんのお部屋に。

りつ そう。なんだか今夜は、またずいぶんと派手に次郎さんとやりあ
つてみたいだけど。(笑って) 大丈夫だった？

和子 すみません。大きな声を立てて。

りつ あなたが謝ることじゃありませんよ。

和子 はあ。

りつ こんなところでよく寝られること。(ともえの寝顔を見て)

和子 ええ。

木村、二階からフアントの瓶を片手に静かに降りてきて、和子に。

木村 (りつに会釈し) あ。(和子に) コレ片づけといてくれるかい？

和子 はい。そこ、置いといてください。

木村 (と、どこぞに瓶を置き) あと。俺のであれだけど・・・、(と、
薄手の毛布のようなものを、ともえにと、差し出し)

和子 (笑って) ありがとうございます。

木村 (去り際に、りつに再び会釈し) あ。

りつ あの。

木村 (ふりかえり)

りつ 明日は、よろしくお願いね。

木村 はい。

りつ ああいう現場はどうしても、場所も場所ですから。

木村 ええ。

りつ 担当のお役人連中にも、だいぶ気難しい人がいるみたいですけど、
その分、うちを信用してくれてるわけですから。間違いのないよ
うに。

木村 資材も、工具も、もう一度キツチリ確認させておきましたし、自
分は昔、ボイラーの補修で一度あそこに行っておりますから、あ
の・・・はい。

りつ ありがとうございます。

木村 うちの若い連中も、この頃なかなか、頼もしいですよ。

りつ そう。きつと、アント達の背中を見てるからですよ。

木村 とんでもない。親父さんの力です。

りつ これからも、しっかりお願いしますよ。

木村 あの・・・。

りつ 何？

木村 あ、や。

奥から、りつを待ちかねて盛がやってくる。

盛 おい。なんだ、いつまで待ってもお銚子がこないじゃないか。
りつ あら。今夜はこれでおしまいって、さつき仰ってましたよ？

盛 (笑って) そうだったかな。(木村に) 木村、明日は一際忙しいぞ。
今夜はしつかり、寝ておきなさい。

木村 はい・・・じゃ。

木村、静かに二階に戻る。盛、ともえの寝顔を見て。

盛 お。(ともえを見て笑いながら) なんだともえは。今夜はここでキ
ヤンプかい？冒険心があつてなかなかよろしい。

和子 さつきまで、英語のお勉強されてたんですよ。(とノートを渡し)
盛 そうか。(満足気に言い、ノートを見ようとして老眼鏡をかけ)
和子 まだ、カタカナですけど。

りつ (ノートを見て) ともえはもう少し字が綺麗になるといいわねえ。
英語もいいけど、まずは日本語がちゃんと出来ないよ。

盛 次郎君はどうした？ともえの寝顔を肴に、仕上げに一杯だけ相手
りつ をしてもらおうかな。

りつ 今夜はおしまい。十分、召し上がったんですから。

和子 旦那様、お水・・・。(お茶場の葉缶から湯呑に水を注ぎ盛に渡し)
盛 ああ、ありがとう。

りつ 次郎さんも、もう上に？

和子 いえ、お散歩に。

りつ こんな時間に？

和子 少し、風に当たりたいと言って。

りつ そう・・・。

盛 夜の散歩も、たまにはいいもんだよ。今夜はお月様が明るいから
りつ ね。

和子 ええ。

りつ やっぱり、男の人にとっては、どこか気づまりなものなのかしら。
盛 ん？

りつ 表札の、二つある家でやってゆくっていうのは。

盛 まあ・・・そりゃ、男にもよるだろうけどね。

りつ 貴子の嫁入りで建てたあのお家が・・・、戦争で焼けてなかったら
盛 ねえ。

盛 おいカズちゃん、おりつの昔話が始まったぞ？こいつにも、お水
りつ を一杯。

和子 はい。

盛 お前さんは、酔うとどうもあの家の話をしたがる癖があるね。
りつ そんなことありませんよ。

盛 (笑って) や、酒に酔うと、失くしたものの話をするんだよ。
りつ そんなこと・・・。

盛 (茶目っ気で) 一緒になる前のことは、知らないけどね。俺と一緒になってからは、いつもそうだったよ。
りつ 酔ってらっしゃるのはあなたですよ。

盛 (笑って、和子に) どうだい？酔ってるのはどっちだと思う？
和子 え。えーと、あの・・・。(どちらとも、とは言えず)

盛 ははははは・・・。
りつ 私はただ、貴子達のが気がかりなだけです。

盛 僕はね、あの時、次郎君が戦地から帰ってきただけでも、貴子は幸運だったと思うんだがね。なあ、カズちゃん。

和子 ええ・・・。
りつ そりゃ、私だってね。頭ではわかってますけど。

和子 あの、どうぞ。(水の入った湯呑を出し)
りつ、湯呑を受け取るが、水は飲まず。

りつ 今でも夢に見ることがあるんです。貴子達の為に建てた、あの青い屋根のお家が、焼けてしまった時のこと。悔しくて悔しくて、わざわざ汽車に乗って焼け跡を見に行つて。そうよ、アンタも、一緒に見に行つたっけね？

和子 はい・・・。
りつ 燃えカスになったレコードの束や、焦げた蓄音機。粉々になった、薔薇の模様のティーセット。なんとかしてあの子の嫁入り道具を、手を汚してでも揃えたものが・・・みんな、空襲でダメになつてしまつて。

盛 おりつ。(優しく)

りつ 箆筒だって、もう今しか作れませんよって言われて、必死にお金をかき集めて、三竿もこしらえておいたのに。着物ごと、全部、焼けてしまつて。

盛 少し、水をお飲み。

和子 ・・・・。
りつ、ごくりと水を飲む。

ともえ ん、・・・ふふつ。(小さく呻いて、寝言で笑い)

りつ この子は、どんな夢を見てるのかしら。(ともえを見て)

盛 うん・・。

りつ、盛、和子、ともえの寝顔を見つめている。

同じ頃、道端。鼓太郎と共にまだ夜空の下にいるハルのところを、次郎が通りがかる。

次郎 あれ・・君？（暗くてよく見えず）

ハル あ・・！こんばんは。やだ、お恥ずかしい。

次郎 なにしてるんだね？

ハル 何って、その、

次郎 あれ？・・オイ、鼓太郎さん？ダメだよ、こんなところで寝ちや。

鼓太郎 ん・・・。（起きはせず）

ハル お知り合いなの？

次郎 同じ家に住んでる居候のじいさんだ。妻の両親の、遠縁の男でね。

ハル そう。

次郎 迷惑をかけてすまないね。よし、僕がおぶって帰ろう。

ハル え。大丈夫かしら？

次郎 大丈夫さ。ホラ・・、

次郎、おぶる形をつくる。ハル、鼓太郎を乗せようとするが、うまくゆかない。

結局次郎ごと、ひっくりかえってしまう。

次郎 アタタ・・、（尻もちをつき）

ハル （笑う）

次郎 笑いすぎだよ。失敬な。

ハル あら、ごめんなさい。

次郎 ふん・・あ。なるほどそうか。地面に座ると、月の見え方が変わ

りますね。角度と高度か。君、それでお月見してたのかい？

ハル や、そういうわけでもないんだけど・・。

次郎、ハル、少し笑いあう。次郎は、月を見上げて。

次郎 いつか、月に行く日が来るのかな。人間は。

ハル え？

次郎 昨日、またスプートニクが飛んだでしょう？宇宙船。今度は3号

だった。

ハル ああ。

次郎 僕は、宇宙船のニュースを見るのが好きでね。

ハル あら、私も。

次郎 （空を見て）おや！

ハル え。

次郎 見えましたよ今、スプートニク3号が、ほら、あそこに！月の横！

ハル え、え、どこ！

次郎 ははは・・・。

ハル あら、ちよつ、ひどいわ。からかわないでくださいよ。

二人、少し笑いあい。

次郎 君は、日本以外の月をみたことはありませんか？

ハル え。月って、国によって変わるんですの？

次郎 僕はね、南方で見たよ。戦争が終わってすぐの頃だ。每晚見た。

ハル そう・・・。

次郎 あれはね、なかなか不思議な気持ちができるものですよ。懐かしいような。それでいて、遠いような。君もいつか、見るといい。見たこと、・・・ありますわ。

ハル え？

次郎 異国の空の、お月様。

ハル へえ、そうか、そりや意外だったな。

次郎 ハルピンで。

ハル ハルピン？君、満州の生まれだったのかい？

次郎 いえ、居たのはね、戦争中だけなんですけど。私ね、これでも、看護婦やってたんですよ。お国の為に。

ハル え・・・なぜ辞めたんです？そんな立派な仕事を。

次郎 なんですしょうね・・・。もうよく思い出せませんわ。

ハル 失礼。立ち入ったことを。

次郎 でも、やめたおかげで、ダンスも少し覚えましてし。

ハル さん・・・。(もにやもにやと意識を取り戻し、起き上がる)

鼓太郎 あら、ふふふ。

ハル あれ？ぼっちゃん、どうしてここに？

鼓太郎 ぼっちゃん？

次郎 その言い方だけは止めてくれって。もう書生じゃないんだから。

鼓太郎 あれ？僕は、どうしてここに？

ハル 帰りましょ？高杉さんが送ってくださるって。

鼓太郎 はあ・・・。すみません、腰が・・・立たない。

次郎 大丈夫ですか、僕、背負いましょう、ホラ、遠慮せずに。

鼓太郎 面目ない・・・。

次郎は、今度は上手に鼓太郎をおぶって歩き出す。

次郎 すまなかつたね、ありがとう。おやすみ。

ハル あの・・・、その角まで。

次郎 そうかい？じゃ、じいさんの靴が脱げないように、見張ってくれ。

ハル (笑う)

鼓太郎は次郎の背中の上で、再び歌を口ずさんでいる。月光の下歩く三人、退場。同じころ、加納の家では、盛が毛布を被ったともえをおぶり、二階へ連れて上がる。寄り添って一緒にあがるりつ。和子は、全てを片付け、台所に向かう。明転。

2-2-1 梅雨の晴れ間

昭和三十三年（1958年）七月六日。日曜日。午前中。美代が、あねさん被りで、廊下の拭き掃除に精を出している。バケツでぞうきんを絞り、てぬぐいで額の汗をぬぐう。窓の外を見上げると、梅雨の晴れ間の空で思わず笑みがこぼれる。この場の美代は、和装である。松島が2階から寝ぼけ眼で階段を降りてくる。

松島 ……（目をこすっている）

美代 おはようございます。

松島 あ、おはよう。

美代 いいお天気ですね。

松島 ああ、おひさまが出たねえ。

美代 うふふ。

松島 もう、梅雨も明けたのかしら？

美代 そうだといいんですけど…。

松島 （あくびをしながら）少し、寝すぎたなあ。

美代 たまのお休みなんですもの。ゆっくりなさってくださいませ。

松島 美代ちゃん、それ似合ってるじゃない。（着物を）

美代 （大いに照れて）あの。奥様にお下がりをいただきまして、自分で少し、仕立て直しを…。

松島 ああ、そう。美代ちゃんは、お針の方は得意なんだね。

美代 え？

松島 ああ、いやいや…。失礼。僕、ちよつと日課を。

松島 松島、休日だが姿勢を直し、まるでひとりきりの朝礼のように、事務机の上に飾ってある額縁入りの社肯を、小さくも大切にそつと言う。美代は見守りつつ掃除を続ける。

松島 一、皆で和合協力し、職場を明るくしよう。一、皆で誠実を貫き、仕事に最善を尽くそう。一、皆で事業を愛し、幸福になろう…。体操！

松島 松島、口三味線でラジオ体操第一を始める。以降、体操を続けながら話す。

美代 精が出ますね。

松島 すみません。これをしないと、なんだか朝が来た気がしなくて。

美代 うふふ。

和子 和子、お勝手の廊下の方から登場し、松島のいる広縁に出て。

和子 （松島に）おはようございます。

松島 おはよう。(体操を続けながら話す)

和美代ちゃん。梅干しの壺、場所わかった？

和美代 はい。二つとも、独身寮のお勝手にお届けいたしました。

和美代 ありがとうございます。

和美代 寮母の淑子さんが、カズちゃんによるしくって。

和美代 そう。(松島へ) タケちゃんが朝寝坊なんて珍しいねえ。

松島 もう、年かなあ・・・。

和美代 何言うの。いいじゃないですか、お休みの日くらい。

松島 昔はサ、いくら夜間工事が続いたって、バシッと起きられたもんだったけど・・・。

和美代 それから、あの、

和美代 なに？

和美代 「今度、浅草で焼きご馳走するよ」って、言われて。こういう時は、どうしたらいいものでしょうか？

和美代 え？淑子さんが？

和美代 いえ、その、あちらの独身寮にお住まいの。

和美代 誰？

和美代 さあ・・・ちよつと、三船敏郎に似た。

松島 ああ・・・！(ハツと思ひ当って、和子と目を見合わせ)はははっ。

和子 営業の山口さんだ。気をつけなさいよ？あの人はああ見えて、結構アレだから。

和美代 はあ。

和美代 大体、最初から焼きご馳走に誘うなんて、下心がありますよ。

和美代 えっ！

和美代 別に、そんなこたないだろ。

和美代 いえ。すき焼きっていうのはね、そういうものです。先月号の婦人倶楽部(雑誌)に書いてありましたもの。

和美代 まあ・・・！

和美代 山口君も、なかなかやるなあ・・・。(体操は終わらない)

和美代 あら、タケちゃんだってまだまだこれからでしょ。

和美代 (笑って)やあ、俺はもういいよ。

和美代 一階から寝間着姿の山村医師が登場。二日酔いの顔をてぬぐいで拭きつつ降りてくる。

和美代 おはようございます・・・。

和美代 あれ?!山村先生、お泊りだったんですか？

和美代 いや、ははは・・・。(きまり悪そうに)

和美代 旦那様と、随分遅くまで。(言って、お酒を飲むしぐさをして)

山村 面目ない。医者の不養生とはよく言ったもんで。

奥の方から、電話の鳴る音がする。美代、少しギクリとする様子がある。

和子 いいわ、私が。

和子、電話のある方向に進もうとするが、他の誰かが取ったようで音が切れる。

山村 おや、切れたかな？（電話の音に対して）

和子 先生。熱いお茶、お出ししましょうか？

山村 あ、ありがたいなあそれは。

和子 朝ご飯、召し上がってってください。簡単なものしか出ませんけ

ど。タケちゃんも食べるでしょう？

松島 ありがとうっ！（体操も佳境になりつつ）

山村 あ、僕は本当に軽くて大丈夫ですので。もう、お茶だけでも。

和子 はい。

和子、お勝手の方向に退場。

山村 今日は、盛さんは？

美代 旦那様は、もうお出かけに。なんだか随分早起きなさって。

山村 凄いなあ（体力が）。見上げた人ですよ、こちらの社長さんは。

美代 今朝は、日本電波塔の工事の見物ですって。

へえ。

美代 お休みが取れると決まってお行きになるんですよ？今日は、とも

えちゃんも一緒に。

山村 ああ、それはいいなあ。

松島 先生は、もう見物なさいましたか？（体操を終え）

山村 や、僕は、あの「赤い塔」はまだ遠くから見たことしか。

松島 なかなか見応えがあるんですよ。

山村 え、建設中なの？

松島 や、そこがね、私らみたいな職人にはまた、堪らなくて。

山村 ああ、なるほど。

松島 （体操で出た汗を、てぬぐいでぬぐいながら）現場って言っても、

もう空の上みたいに高くてね。鳶の連中が登ったところに、下か

ら鍛冶屋が、こう、真っ赤に焼けた鉄のリベットをポーン！と上

にほうり投げてね、それをスポッ！と筒で受けて、結合部にハン

マーで一気にバーン！と。このバーン！で、鉄骨がピシッ！と止

まるわけなんです。

山村 はあ、もはや曲芸ですなそれは。や、職人技というやつだ。

松島 今度、美代ちゃんも連れてってもらいなさいよ。僕、親父さんに

頼んでやろうか？

美代 いえ、私はそんな・・・。

山村 (美代に) ともえちゃんは、元気にしてますか？

美代 ええ。

山村 幸子ちゃんが、サナトリウムに入院してからね・・・、ずっと気にはしていたんですが。ともえちゃん、淋しがってるだろうと思っ
てね。

美代 お元気ですよ。今朝も遠足みたいに大はしやぎで。

山村 そう、良かった。

りつ、電話のある方向から登場。早朝から起きて働いていた風である。

りつ あ、先生。おはようございます、よくお休みになれました？

山村 ええ。おかげさまで、もうぐっすり。

りつ それは良かった。(美代に) カズちゃんは？

美代 今、お勝手に。お食事の支度を。

りつ そう・・・。

美代 何か？

りつ いえ、ちよつと・・・。

再び、奥の方から、電話の鳴る音がする。

りつ (ふと息を止めたのち、笑いながら) やあね。こないだから、ベルが鳴るとなんだかいちいち心臓がドキリとしてしまつて。

美代 ……。

りつ、電話を取るために再び退場。和子、りつと入れ違いに、盆の上に朝食の準備を
乗せて登場。湯呑、茶碗とお椀、箸類。こぶりの味噌汁のお鍋と、ご飯のおひつ等。

和子 美代ちゃん、お新香だけお願いしてもいい？

美代 はい！

美代、お勝手のある方へ急いで退場。

和子 お待たせいたしました。

和子、配膳をし、先にお茶の入った湯呑を山村に。

山村 ありがとうございます。

和子 (松島に) 大盛ですか？

松島 うん。

以降、和子は給仕をしながら会話する。松島は逞しい食欲の丼飯。山村は食が細い。

山村 何かあったんですか？

和子 え？

山村 や、電話のベルが鳴るとドキリとするつて、りつさんが。

和子 ああ・・・、こないだね。小林さんの現場で、事故があつて。

山村 え。小林つてあの、下宿人の？

和子 ええ。それで現場から、ここに電話で連絡がありました。

山村 はあ。

美代、お新香や菜の小皿の乗った盆を持って現れており、ちゃぶ台のそばに盆を置く。

和子 あ、ありがとう。

美代 いえ・・・。

美代、そのまま、バケツの水を変えるために、掃除用具を手に、会釈をして退場。

和子 その電話をね・・・美代ちゃんが取ったんですけど、あの子、びっくりして、ひっくり返ってしまつて。

山村 え？

和子 失神？貧血って言うんでしょうか？ホント、もう少しで先生をお呼びするところでしたよ。

山村 それは可哀そうに・・・。

和子 あちらもいけないですよ？「お宅に下宿してる鳶の職人が、無念にも落下した。残念ながら即死です。」って、連絡ですもの。

山村 そりゃ、どういうことですか？

和子 なんでも、お亡くなりになった方が、同じ信州の方で、年もまったく同じな上に、苗字も一字違いだとかなんとかで、名簿の電話番号を一列間違えてかけたってことなんですけど・・・、奥様が、スグ現場に向かって飛び出そうつてところに、慌ててかけなおしてきましてね。

山村 あちらも、切羽詰まったらしたんでしょう。（深く同情して）

和子 もう平謝りで、スママセンスママセン、って、電話なのに土下座するような口調でしたよ。

松島 おかわりっ！

和子 はい。先生は？

山村 や、僕はもう結構・・・あ、じゃ、お茶をもう一杯。

松島 親父さんはね、こういう時こそ、赤い塔を見に行くのを止めちゃダメだって言ったんです。

山村 え？

松島 出来るだけ話題にして、工事の見物にも行こうって。そうやって参加することが、日本電波塔への・・・新しい日本への、応援になるんだよ、って。

山村 ・・・・。

再び、家の奥で電話が鳴り響くが、和子が立ち上がり廊下に向かうと、電話は切れる。

2-2-2 日本電波塔

日本電波塔のふもと。工事の見物人用の場所に、盛、貴子、ともえ、がいる。貴子は

日傘をさし、ともえは外出の装いで、水筒をかけ、帽子を被っている。盛も、帽子と夏の洋装姿で、休日ながら外出用のきちんとした装いである。

盛、双眼鏡を使って赤い塔を見ている。ともえと貴子も、赤い塔を笑顔で見ている。ともえ　グランパ、私もそれ、見たい。

盛　よし。

ともえに双眼鏡をかしてやり。

ともえ　わぁ……。凄い！

盛　ともえ、何が見える？

ともえ　・・・空！

貴子　あら。赤い塔を見なくちゃつまらないんじゃないの？

ともえ　え。塔はどこにあるの？

盛　ホラ……。(盛り、手を添えて、双眼鏡の角度を誘導してやる)

ともえ　わぁ！・・・すごい。魔法みたい。

盛　ははは……。

半袖シャツ姿の佐々木が、走って戻ってくる。

佐々木　・・・すみません！

盛　随分かかったな。大丈夫かい？

佐々木　あの、公衆電話がなかなか見つからなくて……。

盛　まあ、いいさ。

佐々木　ちゃんと、話はできましたので。(手ぬぐいで汗をぬぐいながら)

貴子　そう、良かった。

佐々木　麦茶、あげる。(水筒を渡し)

ともえ　わぁ、ありがとう。

貴子　ごめんなさいね、私をもっと気をつけていれば良かったんだけど、

すっかりこの子に気を取られてしまっつて。

いえいえ、そんな。や、僕です、僕です。

盛　(笑って) 鞆持ちとしては様になってきたが、朱塗りの重箱は持

ち慣れてないからなあ。

や……。

盛　まあ、家にあつたんなら、良かったじゃないか。

佐々木　本当に申し訳ありません。

ともえ　ママ、今日はお弁当は抜きなの？

貴子　大丈夫よ、ちゃんと届けてもらうから。カズちゃんの、特製弁当

ですもの。

佐々木　美代ちゃんがね、届けてくれるっつてさ。

ともえ　やった。海苔巻き入れてくれるっつて、言ってたの。

盛 まあ、時間は十分あるんだから、のんびり行こうよ。

ともえ ねえ、ママ、あとで公園でシャボン玉もできる？

貴子 ええ。出来るわよ。

ともえ やった！

盛 ともえ、じゃ、ちよっと一回、グランパに返しなさい。

ともえ やだあ、もう少し。

貴子 コラ、ともえ。双眼鏡返しなさい。

ともえ 小林君を見るの。

盛 ははは・・・そうか、ともえはレンズが好きか。

ともえ レンズ？

盛 そうだよ。この中には、レンズって魔法が入ってるんだ。人間が、

もつと世界を見たくて作った技術だよ。(双眼鏡を指し)こんなに

小さくてもね。この中に、人間の、技術と、科学と、夢が入って

いるんだ。

ともえ ねえ、小林君が見たいよ。

盛 どうだろう、ここから見えるかな？・・・じゃ、探してみるから、

グランパに一回返しなさい。

ともえ はい。(しぶしぶ一回返す)

佐々木 凄いなあ・・・。

貴子 ねえ、本当に。命綱もつけないで、よくあんなところまで・・・。

佐々木 綺麗だなあ・・・。

盛 お・・・！あれは、小林君じゃないのかな？

貴子 え、どこ？ねえ、お父さん、どこか教えて。

盛 ホラ、あそこだよ。(貴子にわたしてやり)

ともえ グランパ、私にもかして！

貴子 あら！・・・ねえ、きつとそうよ！

ともえ 手を振ったら見えるのかな？オーイ！！

佐々木 見えないよ、それはさすがに。

貴子 おーい！！

盛 佐々木。(双眼鏡をかそうと、差し出してやり)

佐々木 えっ！いいんですか？！

盛 (笑いながら頷く)

佐々木 (覗いてみて) わあ・・・！すごい！

ともえ おーい・・・！

佐々木 おーい！(佐々木も思わず手を降る)

ともえ 小林くーん！がんばれーっ！

佐々木 小林くん、がんばれーっ……!! (言って、ふと涙ぐむ)

盛 なんだ、大げさなやつだな。

佐々木 すみません。

盛 応援するなら、笑顔でいなさい。

佐々木 はいっ。

貴子 あ!見て、ホラあそこ!あんな大きな鉄骨がするする登ってく。

ホラ、ホラホラ……!

ともえ わあ!……おーいっ!!

一同笑いあい、双眼鏡をかしいながら、いつまでも赤い塔を見つめている。

2-2-3 りつの電話の相手

同日、加納の家。朝食はとうに終わって、松島は二階へ戻り、山村は帰宅した様子。

和子は、朝食の食器などは既に台所に下げて戻っており、ちゃぶ台を拭いたり、共同の居間の掃除をしたりしている。りつが、奥の廊下から登場。

りつ カズちゃん、今、ちよっといひ?

和子 はい。

りつ あの。カズちゃんがどう思うか、わからないんだけど……。

和子 お弁当、やっぱり私が届けに行った方が良かったでしょうか?

りつ いえ、そっちの話じゃなくてね。

和子 はあ。

りつ 清水さんで奥様、覚えている?

和子 清水さま?

りつ さつき、お電話があつて。

和子 ええ。

りつ 昔、あなたに縁談があつたでしよう?

和子 ……どの、縁談でしようか?

りつ ホラ、貴子ともえちゃんを産んだばかりの頃に、ひとつお話が。

和子 あ……缶詰の。

りつ そうそう、缶詰工場で経理してるって方と。あの時、見合いのお

世話をしてくれた方なだけど。

和子 ああ!思い出しました。

りつ その清水さんがね、まだ、あなたのお見合い写真と釣り書きを持

っててくださったみたいで、久しぶりにひとつお話が来て。

和子 え。でも、7年も前のお写真じゃ、さすがに……。

りつ 私もそう言ったんですよ。でも、写真なんてそれでいいんだって、

キツパリ言うもんだから。「どうせ、男も女もエアブラシで修正し

てますから、そんなことはようござんす」って。

和子 はあ。

りつ 年はちよつと上だけど、国語の教師をしてるって。戦争で奥様を失くされたそうなんだけど・・・。

和子 まあ。じゃ、それからずつとおひとりで？

りつ ええ。それが、来年からブラジルの日本人学校へ行くそうで。

和子 ブラジルに？まあ！

りつ 海の向こうでひとりじゃ、何かと苦労があるだろうから、この機会に・・・。

和子

りつ せっかく来たお話ですし。お写真だけでも、貰ってみましょうか？

和子 ええ・・・。

りつ ・・許して頂戴ね。

和子 え。

りつ 本当に、すまないと思ってるの。私かね、もっとお前が若い時に、

ちやんとい縁を結んであげられなかったせいで・・・。

和子 いえ、そんな。奥様のせいなんかじゃありません。

りつ お前をちゃんと幸せに出来ないうちは、私も、おちおちあの世に行けませんからね。

和子 そんな・・・じゃ、その分、うんと長生きをしてくださいませ。

りつ 馬鹿言っちゃいけませんよ。じゃ、お話進めてくれるよう、お伝えするわね？

和子 はい・・・。

和子 次郎と、木村が帰宅する。今日の次郎は機嫌がよいようで、木村と笑いあったりして。次郎は、出張帰りの鞆と服装である。

りつ ★あら、お帰りなさい。

和子 ☆お帰りなさいませ。

りつ 出張、ご苦労様でした。

次郎 うん。なんだ・・・。うちの連中はどうしたんです？

和子 今日は、盛様と一緒に、日本電波塔の見物に。

次郎 あ、そう。

りつ お帰りは夕方だと、貴子から聞いていましたけど。

次郎 やあ、あつちでの打ち合わせが、もうトントン拍子で。予定より

早い汽車に乗れましてね。(上機嫌)

りつ まあ、それは素晴らしいこと。

次郎 彼と駅前でバッタリ会ったもんで、僕の拾ったタクシーと一緒に。

りつ そうでしたか。

次郎

りつ

木村 あの、これ。

りつ なあに？

木村 ケーキです。つまらないものですが・・・。

りつに、ケーキの箱を包んだ大きな風呂敷包みを渡し。

りつ まあ、どうもありがとう。どうしたの？甘いものなんて。

木村 ちよっと、実家に行きましたもので。

りつ そうでしたか。

木村 はい。

りつ (次郎に) 顔、お洗いになるでしょう？お湯を沸かしましょうか？

次郎 や、もう、思い切って銭湯に行つてしまえますよ。

りつ わかりました。カズちゃん、じゃこれ冷蔵庫に。

和子 はい。

和子、ケーキの箱の入った袋を受け取つて、お勝手のある方に退場。

木村 あの、よろしかったら次郎さんもとで。(召し上がってください

と手で示し) 親の店のもので、恐縮ですが。

次郎 ありがとうございますよ・・・。

次郎、二階に上がつてゆき、退場。

木村 姉貴が、どうしても持つてけつて聞かなくて。

りつ 気をつかわせてすみませんね。

木村、会釈して二階へ行くとする。

りつ あ。

木村 ……。(ふりかえり)

りつ あ。この間のお話、考えてくれたかしら？

木村 あ。

りつ その、お返事急かすつもりじゃないのだけれど。

木村 や。

りつ 今日、ちよつどあちらからね、お伺いの電話があつたものだから。

木村 あ、や。

木村 去りかけていた木村は戻り、りつの前に、神妙に正座して座る。

木村 あの・・・。

りつ あら、わざわざ膝をつかなくても。

次郎、風呂セットを持ち、颯爽と二階から降り、早足で通過してゆく。

次郎 じゃ、行ってまいりますっ！

りつ あら、あの・・・お気をつけて！

次郎、フンファンとタンゴの鼻歌まじりで玄関の方に退場。

りつ (笑いながら) 次郎さんは、今日は機嫌が良くてなによりだわね。

一年中、ああたったらいいんだけど。ねえ？

木村 ……申し訳ありません。(深く頭を下げる)

りつ え。

木村 せっかくのお話なのですが。やっぱり、無かったことに。

りつ ね、会うだけでもあってみたら？お若いし、お家も申し分ないし。

木村 や。

りつ せっかく夏から工事部の課長にもなったんですし、いつまでも独

り身でいたんじゃないや、もったいないじゃないの。

木村 昇進のことは、父もとても喜んでくれたんですが。その、見合い

りつ の話だけは、…やっぱりどうしても切り出せなくて。

りつ なあに？どうしたの？

木村 父の店が、ちよつと…。

りつ 良くないの？

木村 お恥ずかしい話なんです…。とても縁談どころじゃ。

りつ そう。

木村 今年に入ってから、材料の値段がどんどんハネ上がってるのかな

りつ んとかで。このままいくと、倒産しても仕方がないって、父が。

りつ ……。

木村 あの…。少しだけ、自分の退職金を前借させていただけません

りつ でしょうか？(土下座)

りつ お金なら、私がなんとかします。水臭いじゃないか。

木村 すみません…。

りつ 明日、すぐ用意させるから。ひとまず、3…や、5(万)包み

りつ ます。それで足りて？返すのは、いつでも。

木村 あの、

りつ いいから、顔をおあげなさい。

木村 すみません。この御恩は必ず。

りつ ご家族に、お菓子のお礼をお伝えくださいね。

木村 とんでもないです。

木村 二階に退場。

りつ ……。

りつ りつ、ひとつ、細く長い溜息をつく。そのまま洋間に行き、窓の外の庭をし

し眺める。洋間につづく奥のピアノの部屋へ退場。

和子、お勝手の方向から登場。手に紅茶のポットと、カップと、ケーキ

の皿、フオーク、ミルク入れの載った盆を持っている。りつの姿を探し。

和子 ……奥様？(小さく)

洋間の奥の方から、ピアノを弾く音がしている。(ドビッシーの「夢」)
和子は、そーっと、洋間のテーブルに紅茶のカップやキーキの皿を置き、盆を持
ったまま、音楽に引き寄せられるようにゆっくり歩んでピアノの部屋の入り口に進む
和子
.....

ピアノを弾くりつの後ろ姿を、微笑みながらそっと見つめている和子。溶暗。

3-1-1 八月の手紙

昭和三十三年(1958年)、八月の、いくつかの日々。広縁で幸子への手紙を
読むともえの声がする。時間ごとの夏蝉の声が、八月を包むよう鳴いて。
ともえ 幸子へ。お元気ですか？お姉ちゃんは、今夏休みです。本当は会
いに行きたいのだけど、ママと一緒に連れてつてくれません。マ
マが言うには、「ああいったところには、あらゆる菌がいるから、
子供は絶対に行つてはダメ！」なのだそうです。でも、幸子だつ
て子供なのに。世の中は、謎だらけです。

この町の人々が、あらゆる場所で、それぞれの夏を過ごしている。そし
て、それぞれが時折、ともえと出会う。ともえと大人達が出会うたびに、
その都度、八月の日付や時間が、切り替わり、積み重なってゆくようだ。
貴子登場。

貴子 ともえ！幸子から、手紙のお返事が来たよ！

ともえ 本当？

貴子 看護婦さんが一緒に書いてくださったのよ？ホラ(見せて)「わた
しはきょう、ぎゆうにゆうをのみました。にはいのみました。」だ
つて。凄いわ！二杯も飲むなんて！がんばってるのねえ、幸子は。
そうかなあ。

貴子 がんばってるじゃないの。ね、ともえは、今日はどんなお手紙書
いたの？見せて頂戴。

ともえ ヤダ。。。

貴子 あらどうして？ママに見せられないようなことが書いてあるの？
私と幸子の、女同士の秘密にするんだもの。

貴子 ま、なんですかその言葉は？！女の秘密？！まああ。とにかく、
見せなさい！

ともえ、うじうじ見せずにいるところに、次郎が来て、貴子を呼び。

次郎 オイ、貴子。

貴子 はい。

次郎 この本を読んでおきなさい。(分厚い本を差し出す)

貴子 なんですの、コレは？

次郎 タングゴの踊り方の本だ。読むと、踊れるようになるらしい。

貴子 え？はぁ・・・。

次郎 はぁ、とはなんだ、前にダンスを習いたいって言ってたろう。よその奥さんは、今、皆やっているとかなんとか言ってる。

貴子 あら、覚えててくださったの・・・？

次郎 お前だって、まさか他の男と踊るわけにはいくまい。俺も読むから、お前も読め。

貴子 はぁ、なんだか。

次郎 遠慮するな。ちゃんと2冊買ってある。

貴子 はまごまごしている。と、ともえは、隙について走って逃げだす。

貴子 あ・・・！ともえ、お家の中、走らないの！

ともえ、さきほどとは違うところから現れ。

ともえ 幸子へ。夏休は、とても楽しいです。おばあちやまとデパートでアイスクリームを食べたり、グランパと赤い塔を見に行ったり、忙しくって大変なの。そのうえ、自由研究というものまであるんです。去年は朝顔の観察をしたけど、今年は、英語の個人研究を生かして、インタビューをすることにしました。これで私も、コクサイテキジャーナリストへの仲間入りです！・・・山村先生！

ともえは近所の道で鞆を地面に置き、餌でもやろうかと、野良猫に挨拶をしている山村医師と出会う。

山村 おや、ともえちゃん。

ともえ こんにちは！

山村 こんにちは。いいご挨拶だね。

ともえ インタビューをしてもいいですか？（ノートを開き、鉛筆を持ち）

山村 え？なんだろう。僕、映画スタアじゃないけど、いいのかい？

ともえ 夏休みの宿題なんです。

山村 ああ、そりゃいいや。

ともえ 先生の、好きな英語の言葉はなんですか？

山村 え・・・何かなあ。

ともえ 10秒以内にお答えください。

山村 え、あ・・・じゃ、コロッケ。

ともえ コロッケ。（メモする）

山村 あ、違うな。それは英語じゃないか。ええと、じゃ、グツ・モー

ニング。おはようございます。

ともえ グツ・モーニング。

山村 うん。

ともえ なぜ、好きなんですか？

山村 朝、目が覚めるっていうことは、本当は凄いいことなんだよ。とつても尊いことなんだ。生きている証拠だからね。

ともえ はあ。・・・ご協力ありがとうございました。

山村 今日は陽射しが強いから、お水をたくさん飲むんだよ？

ともえ はい。

そこに、ハルが走ってやってくる。

ハル ・・ああ、良かった間に合った。

山村 どうしたの？

ハル これ、汽車の切符。

山村 や、しまった。危なかったなこりや。ありがとう。

ハル じゃ、気をつけていってらっしゃい。

山村 うん。

ともえ ・・・・。(ハルをじーつと見つつ、緊張している。)

ハル あら。お嬢ちゃん、どうしたの？迷子？

ともえ いえ。

山村 ホラ、高杉さんとこの・・・。

ハル え。

ともえ さよならっ！

ともえ、走って逃げる。

山村 ともえちゃん！・・・転ばないようにね！

ハル ・・・・。

鼓太郎が現れ、かくれんぼをして、ともえを探している。

鼓太郎 もういいかい？

ともえ (声) まあだだよー。

鼓太郎 もういいかい？

ともえ (声) ・・・・もういいよー！

鼓太郎 (わざと) ・・・・はて。いったいどこに。

鼓太郎、ともえを探して歩いてゆき、廊下の奥に退場。ともえ、走り出るように登場。どこに隠れるか物色している。と、美代がお勝手の方から来て。

美代 あら、ともえちゃん。みーつけた。うふふ。

ともえ しーっ！しーっ！(必死で)

美代 あ、ごめんなさい。

ともえ あ！ねえ、美代ちゃん、かくれんぼ終わったら、イン

タビューをしてもいい？

美代 インタビュー？

「ただいま帰りましたー。」と、小林の音がする。ともえは、反射でと

つきに共有スペースの居間の押し入れの中に隠れる。小林、広縁に登場。

美代 おかえりなさいませ。

小林 あ……。ただいま。

美代 (会釈して二階に行こうとする)

小林 あの。こないだは、すまなかったね。

美代 え？

小林 ハンカチ。美代さんに選んでもらったおかげで、田舎の母も喜んでくれたみたいです。

美代 そうですか。ああ、良かった。

小林 洋品店なんて、普段は滅多に行かないものだから。

美代 またいつでも、お手伝いいたしますから。(二階に行こうとする) や、あの。

美代 ……。(立ち止まり)

小林 前にさしあげた手ぬぐいは、どうも地味すぎましたね。

美代 あら、そんなこと。大切に、……しまいこんでおります。

小林 や、使ってください。バンバン。

美代 あら、ごめんなさい。私なんだか、言い方が違いますわね。あの、今度、すき焼き食いに行きませんか！(思い切って)

美代 え……。

小林 浅草で、すき焼き。いかがですか？

美代 すき焼き、ですか……。

小林 ええ。あ、肉は、お嫌いですか？

美代 いえ、あの……。私、その。少し、考えさせてください。

美代、顔を真っ赤にして、二階に駆け上がってゆく。

小林 あ……。

小林、廊下から和室の居間へ。ともえ、押し入れの襖をすつと開ける。

小林 え……。!(ともえと目が合う) 君、いつからいたの。

ともえ あの、ちよつとだけ、インタビュウをしてもいいですか？

小林 や、お答えできるようなことは、僕は何もつ。

小林、急ぎ足で廊下の奥の廁のある方向に退場。

鼓太郎 もういいかい？ともえちやーん?!(駆け抜ける)

ともえ、またそーつと襖をしめて隠れてしまう。髪飾りなどつけた和子が、洋間におやつ菓子皿と麦茶のグラスを並べ終え、ともえを呼ぶ。

和子 ともえちやーん!おやつですよー。ともえちやーん!

ともえ、襖の奥以外のところから現れて。

ともえ ありがとう、カズちゃん。

和子 今日は、水羊羹でございます。(うやうやしく)

ともえ わあ。いただきます。

和子 旦那さまが、ともえちゃんにとって。

ともえ グランパが？

和子 お留守番のご褒美ですって。

ともえ グランパいっお帰りになったの？！

和子 お召し物を代えに返られて、パクっと水羊羹を食べたら、またスグにお出かけになりましたよ。出張ですって。

ともえ そう・・・。

和子 インタビューはどう？順調ですか？

ともえ 今朝、パパに聞いたらね、「自分は、英語なんぞより、ドイツ語の方がずっと好きだ。」って。

和子 おやま。

ともえ ドイツ語の詩というのを諳んじてくださいました。英語だって、

言ったのに・・・。

和子 そう。パパは軍人さんでしたからね。色々あるんでしょう。

ともえ カズちゃんも、好きな英語の言葉、今度教えてね。

和子 はあ。一番好き、ということになると迷ってしまいますわね。やっぱり、クラーク・ゲイブルか、カーク・ダグラスか・・・。

ともえ なんだか、今日のカズちゃんとっても綺麗。口紅してるの？

和子 あ。これはちよつと・・・、昼間、お見合いがあったもので・・・。

ともえ ふう、美味しかった。ご馳走さまでした。(飛び出してゆく)

和子 あら。ともえちゃん、廊下は走らない約束ですよ・・・！

ともえ、廊下を走りぬけ、広縁でアイスクャンデーを食べる、松島、木村、佐々木とすれ違い、会釈する。そのまま廊下の奥に退場。

二階の欄干に盛とりつがいて、天体望遠鏡を設置しおえ、ともえを呼ぶ。

盛 ともえー！ともえ、いないのか？ともえー！

りつ そんなに呼ばなくても、そのうち出てきますよ。

盛 早く見せたいじゃないか。

ともえ、盛とりつのもとに登場。ともえは、ノートと鉛筆をいれたポシエットを着けている。

ともえ グランパ！おばあちやま！おかえりなさい！

りつ ただいま。

盛 ホラ。(天体望遠鏡を手で示し)

ともえ え・・・これ、天体望遠鏡？

盛 うん。お前、レンズが好きだったろう。

ともえ

凄い。本物、はじめて見た。

盛

ともえへの、プレゼントだよ。

ともえ

わぁ！グランパ、おばあちやま、ありがとう。

盛

これなら、双眼鏡よりずっと遠くが見えるぞ。宇宙を見るレンズだもの。火星だって、月に住むウサギだって見えるんだよ。

ともえ

すごい。

りつ

ともえ、望遠鏡で見ても、ウサギは見えませんか？

盛

なんだ、夢の無いことを言うなよ。

りつ

あら、でも覗いてみていなかったら、がっかりするじゃないの。

ともえ

ウサギ、ホントは居ないんだ・・・。

りつ

月のウサギさんはね、人間の想像力の中に住んでるの。目を閉じれば、ちやあんと見えるんですよ。それは、見えなくても居るとおんなじなの。

ともえ

見えないのに、ちゃんと居るの？

りつ

そう。

ともえ

なんだか、とても難しい・・・。

りつ

(豪快に笑う)

盛

さ、覗いてごらん。

ともえ

(覗いて)・・・わぁ。

盛

ともえ、何が見える？

ともえ

夕焼け。それから、私の町が見えます。

盛

そうか。

ともえ

ねえ、グランパ。

盛

ん？

ともえ

グランパの好きな英語の言葉は何？今年の自由研究なの。

盛

一番は何かなあ・・・。ちよつと、考えておこう。

りつ

おばあちやまはね、ミルク。

ともえ

え？

りつ

疲れた時には、牛乳が一番美味しいもの。ふふふ。

ともえ

うふふ。ミ・ル・ク。

盛

あ。見てごらん、飛行機が行くよ。

ともえ

え？どこ？・・・わぁ！

りつ

今日はまた綺麗な夕陽なこと。

盛

うん。

ともえ

おばあちやま。

りつ

なあに？

ともえ おばあちゃまが子供の頃も、やっぱりお空は、大きかった？
りつ ええ、そうよ。おひさまがあつて、おつきさまがあつて、夕焼け

は、やっぱりこんな色でしたよ。

ともえ すごい。じゃ、その頃からずーっと、お空はひとつだけなんだね。

りつ ああ・・・、そうね。

盛 夜空になつたら、もういつぺん覗いてごらん。月を見るといい。

ともえ はい。

りつ あら！ほら、あそこ。一番星。

ともえ わあ・・・！うふふ。

夕餉の支度を終えた和子が、呼びに来る。

和子 旦那様、奥様、お食事の支度ができました。

りつ ありがとうございます。

盛、りつ、和子、去り、ともえだけが残る。空に手紙を書くように語る。

ともえ 幸子へ。夏休は、とても楽しいです。だけどあつという間です。

今日は幸子の夏のブラウスに、美代ちゃんがアイロンをかけてく

れました。だから、いつ戻って来ても大丈夫です。来年はきつと、

一緒にアイスクリームを食べようね。ともえより。

暗転。

3-2-1 台風の前

昭和三十三年（1958年）、九月二十六日。金曜日。午後遅め。

嵐の前のような強い風の音がしている。ポツポツと雨も降っている。台風が近づいて
いるようだ。共有の居間では座卓に鼓太郎と小林と美代が座り、黙々と、折り紙で鶴
を折っている。千羽鶴を作っている様子。ゴロゴロと雷鳴が鳴り、鼓太郎と美代、思
わず戸外の音に聞き耳をたてて。

鼓太郎 ザーッと来るなあ、これは・・・。（雨が）

美代と小林、千羽鶴を折り続けている。鼓太郎、疲れてしまったのかゴロリと休み。

鼓太郎 ふう・・・。（疲れた目を押えたりして）

美代が、小林の前にある折り紙を新たに一枚手に取る。小林は美代と目が合い微笑む。

鼓太郎 ・・・・こないだのアレは、どうなったんです？

小林 え。

鼓太郎 （美代に）いや前にね、浅草見物をさせたい人がいるから、うまい

もの食わせる店を教えてください。急に私に聞いてきて。

美代 あら。

小林 や、あの、それは。

鼓太郎 それも、女は一人だけじゃないって言うんだもの。女を二人も連

れてくつていうんですよ、この人は。二人も、女を。

美代 まあ。

鼓太郎 ひとりじゃ足りないってんだから。ぐふふ。

小林 鼓太郎さん、ちよつと、

鼓太郎 そいで、老舗のすき焼き屋を教えてあげてね。(小林に)うまきい
つたんですか?その、すき焼きの女とは?ええ?ふふふ。

美代 ……

小林 ……あ、間違えたつ。(折り紙を失敗し、苦し気に)

ついにザーツと雨が降って来る。鼓太郎、雨の音が気になる。

和子が、鼓太郎と美代を探して、小走りに現れて。

和子 (美代へ)美代ちゃん。お二階の奥の雨戸、しめてくれたわよね?

美代 はい。

和子 そ。ねえ鼓太郎さん。ロウソクの買い置き、いつもの棚に無いみ
たいなんだけど?

鼓太郎 え?ロウソク?

和子 停電になったら困るから、って昨日お願いしたわよね?

鼓太郎 や、昨日のうちに買っておいたよ。

和子 でも無いんですもの。

鼓太郎 棚にいれたはずだけどなあ。

和子 変ね。

鼓太郎 カズちゃんの見間違いじゃないの?

和子 アラ、ちゃんと隅々まで見ましたよ?!

鼓太郎 (しゃあしやあと)棚にいれた後のことは、僕はちよつとわから
ないな。

和子 んーっ…!!いつつもそうやって。

美代 あ。納戸の中とか?

和子 そんなのとづくに見たわよっ!

美代 すみません…。

鼓太郎 (ぶつぶつと)美代ちゃんに怒らなくても。

和子 無いっいたら無いのっ…!無いから聞きにきたんでしょっ?!

奥の部屋から来たりつ、廊下で和子の荒ぶる声を耳にし立ち止まっていたが、現れ。

りつ カズちゃん。

和子 はいっ。

りつ 熱いお茶、もらえるかしら?

和子 お紅茶ですか?

りつ お番茶でいいわ。濃い目に淹れて頂戴な。

和子 はい…。

和子、お勝手の方に退場。りつ、去る和子の後ろ姿を、心配そうに見つめている。

鼓太郎 (ぶつぶつと) なんだい、今日のカズちゃんは。

小林 台風が来ると、頭痛がするというご婦人もいるそうですよ？きつとそのせいでしよう。

美代 あの。今朝、お見合いのお返事の電話があつたとかで。それが、美代ちゃん！余計なこと言わなくていいんですよ？

美代 すみません。

りつ (小林に) ごめんなさいね、お見苦しいところを。

小林 や、そんな。

りつは事務机に座り何か書き物をしている。ともえ、二階から小走りに降りてきて、廊下のある方の廊下に通過しようとし、千羽鶴を作る3人を発見すると、立ち止まり。

ともえ わあ。ありがとうございます。(ペコリとお辞儀をしながら)

小林 妹さん、早く良くなるといいね。

ともえ、もう一度ペコリと小林にお辞儀をして広縁を通り、廊下の奥へ通過してゆく。りつ ともえちゃん、廊下はゆっくりですよ？

ともえ、奥まで通過しかけたが、急ブレーキして、そのままトコトコ戻ってきて。

ともえ あの・・・

小林 ん？

ともえ 今日、先生がおっしゃってました。もうすぐ、あの赤い塔が完成するんですよ。

小林 うん。

ともえ あの。最後までご無事で、がんばってください。

小林 ありがとうございます。

ともえ

私のクラスね、塔の呼び名の募集に応募したんです。皆で一生懸命考えて。先生がハガキ出してくれたの。

小林 ★そう。

りつ ☆あら、じゃその名前に決まるといいわね。

貴子、二階から女中を探しに降りてきて。

貴子 ともえ？！お手洗いに行くんじゃないの？

ともえ あ、うん。

貴子 早く行きなさい。まだ宿題が残ってるでしょ？

ともえ はい・・・

ともえ、廁のある方へ足早に退場。

貴子 美代ちゃん、レモン水作ってくれないかしら？おやつはあれじゃなきやヤダって、うるさくて。

美代 はい。

美代、千羽鶴を折る手を止め、お勝手の方に退場。小林、美代を目で追ってしまふ。

りつ 勉強もいけれど、少し遊ばせてやったら？

貴子 学校早く終わったせいで、宿題いっぱい出ちやったのよ。歌の練習も見てやらなきやだし、頭が痛くなりそうっ……。

と、ともえ、厠の方から小走りに戻る。小水を我慢しているような様子がある。

ともえ ねえコタジイ、ちり紙出して。(我慢する為足踏みをしながら)

鼓太郎 え。あ！……はいはいはい。

ともえ 早くっ……！

鼓太郎は走り、後を追ってともえも走る。二人は、厠のある方に大急いで退場。

貴子 ともえっ！なんですかお行儀悪いっ！！

りつ 貴子！そんな大声をだすもんじゃありませんよ？

貴子 ……はい。

貴子、親に叱られしよんぼりしながら再び二階へ。りつと小林だけが残る。りつ、鶴を折る小林の横顔を見つめ。

りつ 淋しくなるわね。

小林 え。

りつ あの塔が完成するのは楽しみだけど。小林君が居なくなるんじゃないや。そんな。明日いなくなるってわけじゃないんですから、まだそんなこと、仰らないでください。

りつ ……。

3-2-2 小さな嵐

盛、木村、松島、佐々木、が帰宅する。全員、現場から直行したような作業着姿。

この日は、無言で笑い声もなく部屋にaggってくる。

りつ あ……お帰りなさいませ。(すぐ椅子から立ち上がって出迎え)

盛 うん。

小林 お疲れ様です。

盛 (小林に) ああ。君のとも、今日はさすがに休みか。

小林 はい。

盛、古い事務機の椅子に、ゆっくり腰掛け、細く息を吐く。

りつ 急な呼び出しで大変でしたね……。

盛 きつちり直して、頭を下げてきたよ。

りつ そう。お疲れ様でした。

盛 詫び状を送っておいてくれ。一番丁寧なやつを。

りつ わかりました。

木村 ……申し訳ありませんでした！(頭を下げる)

盛 ……。

松島 木村君。

りつ (小林に、優しく) 洋間を使っていただけですか？

小林 (察して、黙って頷き)

小林は、千羽鶴用の千代紙と、出来上がった千羽鶴を入れた箱を持って、そっと洋間に移動する。佐々木、松島、神妙な顔をして、木村と盛を見守っている。

木村 ……

盛 どうしてお前が謝るんだ。

木村 配管の最終確認に、自分の慢心が出たと思うからであります。

盛 ……本気で言ってるのか。

木村 はい。

盛 そうか。

木村 この責任は、自分が。

松島 親父さん。ガスケットが不良品だったってことはないんでしよう

か？木村がフランジ接続でポカをするなんて、ありえませんか。

盛 ……

松島 部品屋のじいさん。この頃納品のたんびに、忙しすぎて目が回る

って。それに痛風がひどいって。もしかして検品に漏れが、

盛 松島。下請けのせいにするな。

松島 ……すみません。

佐々木 ……。(何も言えずに廊下で立ち尽くしている)

美代と和子が、お勝手から登場する。美代は、レモン水とオヤツの皿の載った盆を持って二階へ。和子はりつのお茶の載った盆を持っているが、部屋に入らず立っている。

和子 あの。

りつ ごめんなさい。悪いけど下げて頂戴。

和子 (お辞儀だけして) ……

盛 和子、りつのお茶の載った盆を持ってそのまま勝手に引き返す。雷鳴が鳴る。

盛 慢心が出たと思うなら、明日から、死ぬ気で初心を探しなさい。

木村 親父さん、あの、

盛 (重く厳しく) 二度目は無いぞ。今回きりだ。

木村 はい。

盛 三人とも朝からご苦労だった。部屋に戻りなさい。

木村、松島、は盛に頭を下げて二階へ。佐々木は、持っていた盛の鞆をりつに渡し、頭を下げて二階へ。盛、社是の入った額縁を手にし、見つめている。

盛 ……

りつ 風、凄いわね…。停電にならないといいんだけど。

盛 まだ、高台の下の川辺に家があった頃にさ、

りつ ええ。

盛 台風で川が溢れると、あのボロ家の辺りは水浸しで。赤ん坊の貴子をこーやって、押し入れの上の段に寝かせたりしただろう？

りつ ああ、ふふふ。

盛 あの頃は事務所って言ったって、この机が一台あるだけで。

りつ そうね。・・どうしたの？急に。

盛 貴子が。アイツがもし男だったら、跡継ぎになってくれたかな。

りつ ・・息子なら、沢山いるじゃないですか。

盛 うん。

廁の方から歌声が聞こえる。ともえと鼓太郎が、「冬景色」を歌いながらやってくる。

鼓太郎 あ、社長。(会釈をして)

ともえ (ふざけて) グランパ社長、おかえりなさい！

盛 ただいま。

ともえと鼓太郎は、ともえの指揮で行進しながら、元気に「冬景色」の歌を歌い、広縁を通り、そのまま二階に向かってゆく。廊下にいた小林に手を降ったりしながら

りつ、盛を励ますように、その手に手を重ねる。二人微笑みあい、奥の部屋に退場。

小林、ともえ達の行進を見送ったまま廊下に居て、盛達の居た居間を見つめている。

と、二階から、美代が降りてくる。

小林 あ。

美代、会釈してお勝手のある方へ去ろうとする。

小林 あの。少し、話せませんか。

美代 なんてでしょうか。

小林 すき焼きのこと。

短い間。

美代 あの・・。すき焼きのお誘いは、お受けできません。すみません。

小林 待って。

美代 お返事遅れてしまって、本当にごめんなさい。

小林 美代さん、聞いてくれないか。お願いですから。

美代 ・・・。

小林 浅草に行くのに女が二人、というのは本当です。でもそれ、

美代 違います。別に、そのせいじゃないです。

小林 聞いて。でもそれ、美代さんと、うちのお袋のことなんです。

美代 え。

小林 僕がクニに帰る前に、お袋が一度こっちに来たいと言っていて。

美代 キチンとお伝えして誘えば良かったのに、勇気が出なくて。ごめんなさい。

美代 ……。

小林 お袋の東京見物に、付き合っただけでやってくれませんか？美代さんのことを紹介したいんです。

美代 あの、私はただの女中ですし。

小林 初めてお会いした日から、心に決めていました。この人だつて。

美代 ……。

小林 僕と、結婚を前提におつきあいしてくださいませんか？

美代 ……私。

小林 2週間後に、僕の日本電波塔での仕事が終わります。身勝手なお願いだとは思いますが、どうか、それまでにお返事……、

3-2-3 静かなタンゴ

次郎とハルが、玄関からやってくる。

次郎 帰ったぞ……！

美代、次郎の声に気づき急いで出迎える。慌てた小林も、つい一緒に出迎えてしまう。

美代 お帰りなさいませ。

次郎 うん……おや、どうも。

小林 あ。(次郎に会釈して)

次郎 (美代に) 君、お客様に熱いお茶を。

美代 はい。

美代、小林にも会釈して、逃げるように足早にお勝手に退場。

次郎 この天気じゃ、さすがに工事もお休みですか？

小林 ええ。歯がゆいんですが。

次郎 (ハルへ) 君、彼はね、スタアなんだよ。

ハル え？

次郎 あの建設中の赤い塔を建ててるのは、この人だ。

ハル まあ、そうなんですの？

小林 いえ。大勢の職人が、命をかけてやっておりますので。自分はこの……ただの独り身の鳶です。失敬。

小林、二階へ退場。

次郎 硬派だなあ、彼は。実に清々しい。

ハル ね、高杉さん。私やっぱり、帰るわよ。

次郎 どうして？この雨の中を来てくれたのに、お茶も出さずに帰せませんよ。(次郎は鞆を置き、ハルの座布団を出して座るよう勧め)

ハル でも。

次郎 遅いな。

ハル え？

次郎 お茶が来ない。

ハル あら、さつき頼んだばかりですもの。

次郎 ああ、そうか。

ハル (つい笑う)

次郎 何です？

ハル いえ。

ともえが、「冬景色」の歌をハミングしながら、二階から降りてくる。さきほど違
い、貴子が「いち、に、さん」と指揮していて、ピアノの部屋に向かおうとしている。

次郎 オイ、今帰ったぞ。

貴子 え！あ、あら、お帰りなさいませ。(鳩に豆鉄砲のように驚き)

次郎 なんだその顔は。それが、夫を迎える妻の顔か！

貴子 すみません。

ともえ お父さん、お帰りなさい。(しっかりと頭を下げて)

次郎 うん。ただいま。

貴子 (ハルを見て次郎に) お客様ですか？

ハル その節は、奥様には本当に失礼いたしました。

貴子 あ。あなた、いつだったか・・・。

ハル ハルと申します。

次郎 僕のタンゴの先生だよ。

貴子 ★まあ、そうだったんですか。

ハル ☆あの、別にそんな。

貴子 いつもうちの主人がお世話になっております。

ハル ・・・・。

次郎 ともえ、ちゃんとご挨拶をしなさい。

ともえ ・・・・。 (緊張して)

ハル こんにちは。

次郎 これは、うちの上の娘でね。

ハル ハルに微笑まれたたともえ、急に走りだし、2階に戻ってしまふ。

貴子 あら、・・・ともえ?!

次郎 なんだあいつは？

貴子 (ハルに) すみません。

ハル いえ。

次郎 参ったよ。天気の良いで、会社から早めに帰って事になってね。

貴子 お出迎えもせず、申し訳ありませんでした。あの、二階でともえ

と歌の練習をしておりますもので、その、お声が遠くて、

次郎 歌なんてしらん！夫婦なら、聞こえる時には聞こえる。

貴子 はい。妻として、夫の聲が、聞こえる時には聞こえるように、も

つとよく気をつけます。(嫌味ではなく丁寧に、貴子は頭を下げる)

和子が、お茶の湯呑ふたつと、急須の載った盆を持ってやってくる。

和子 お待たせしました。

次郎 遅いぞ。

和子 申し訳ありません。

次郎 なんだ、あの尾道の痩せた女中はどうした。

和子 お茶碗を割ってしまいました。お勝手に泣いておりますもので、

代わりに私が。

貴子 あら、美代ちゃん具合でも悪いの？

和子 さあ。泣きたいのはこっちですよ。

和子 (和子に) あの、鼓太郎さんはいらっしゃいます？

和子 コタロウって、あの鼓太郎ですか？

和子 あの、コレを・・・。(鞆から包みを出す)

次郎 じいさんの忘れ物を預かっているとかで、わざわざ玄関まで届けて

くださったんだよ。

貴子 まあ。本当に申し訳ありません。

和子 お財布だったもので。それと、こちらはロウソクみたいなんです

が・・・。

座卓の上に、鼓太郎の財布と、ロウソクの箱が4箱ばかり並ぶ。

和子 (しかと見て) 間違いない鼓太郎さんのものです。私が、渡して

おきますね。

貴子 悪いわね。

和子 おまかせください。

和子、ロウソクの箱と財布をお盆に載せて二階に退場。

次郎 ・・オイ、鼓太郎さんをこっちに呼んで来る方がいいんじゃない

か？

貴子 ああ。

和子 あら、いいんです。私はもうこれで。

貴子 せめてお茶を召し上がってくださいな。

和子 あ。はい・・・。(がんばってお茶を飲む)

次郎 呼んでこよう。せめて礼を言わせないと。

次郎、ずんずんと二階へ退場。和子と、貴子が残る。

和子 ・・・・。

貴子 粗茶ですみません。

和子 いえ。私が淹れるのより、ずっと美味しいわ。

貴子 ……。(急須の中のお湯の量を見たりしている)

ハル 仲がよろしいんですね。

貴子 え？

ハル 羨ましいいわ。私、独りもんだから。

貴子 あらそんな、全然。

ハル 夫婦なら、聞こえる時には聞こえるって言うのは、なんですか？

貴子 はあ。遠いくらいなんだ、お前は、それでも俺の妻か！と。

ハル あら。

貴子 物理でも科学でも証明できないことだってある。と申すのですが、

あの人は海軍で潜水艦のエンジニアをしていたものですから、難しい言葉ばかりで、私にはサツパリ。

ハル 高杉さんらしいですね。

貴子 え。

ハル 心があれば、月と地球ほど遠くても、おしゃべりできるとお思い

なんじゃないかしら。

貴子 月？あの人、月なんて見るのかしら……。

ハル ……。(お茶を飲む)

貴子 ハルさんは、タンゴの先生をなさいますの？

ハル ああ。あの、昔ダンスホールに少し居たもので。

貴子 私、ダンスは娘時代に少しステップを齧っただけで。タンゴの本

はしっかり読んだんですが。

ハル 本？

貴子 ええ。早く上手に踊れるようになりたいわ。

ハル は、笑いながら立ち上がって、タンゴのパートナーが手を組む形を作る。

ハル 私を、男だと思いいなくなってみて。

貴子 はあ……。

貴子、おやおずとハルと組む。どこを見ればいいのかわからず、きよろきよろして、結局ハルをじーっと見つめてしまう。ハル、笑って貴子の顔を両手で包み、顔の向きを正し、頬と頬が合うようにする。

ハル 顔はこう。・バルドツサのステップは？

貴子 はい。なんとなく。

ハル じゃ、足を私にあわせてみて。いち、にさんし、いち、にさんし。

ハル、カウントを囁きながら、貴子と一緒にゆっくりとラピス&バルドツサのステップを踏む。ハルのリードが素晴らしく、ダンスはだんだん、官能的なタンゴとなる。

ハル そう。(笑って) 離れないで。私のこと、恋人だと思って頂戴？

貴子 ……。(怖がるように、ふいにやめてしまう)

ハル ごめんなさい。ただの例えよ？タンゴは、恋の情熱の踊りだから。
貴子 よく、わからないわ。

ハル え？

貴子 恋心と言われましても。

ハル (笑って) あらだつて、結婚して、娘さんまでいらっしやるのに。

貴子 結婚と言つても、女学校を出る時に親が決めただけですもの。

ハル ……

二階から、ともえが降りて来て部屋の入口に立つ。

ともえ ママ。

貴子 ともえ……。パパ、お二階に居なかった？

ともえ 喧嘩してる。

貴子 え？

ともえ コタジイのことで、カズちゃんと言ひ合いになつて。

貴子 まあ、カズちゃんど？！一体どうしちゃったのかしら……

ともえ あの……。聞いてもいいですか？

ハル 私？

ともえ お姉さんは、山村先生の奥さんなんですか？

ハル ……違うわ。

貴子 すみません。ともえ、何言ひ出すの？

ハル もうほんとにおいとましなきや。

貴子 でもこの嵐じゃ。誰かに送らせましょう。

ハル 嵐なんて、大陸の空襲に比べたら楽勝ですわ。

貴子 ……

ハル 送らないでください。もうここで。ひとりで大丈夫ですから。

ハル、広縁を通り玄関の方へ退場。貴子、その背中を見送つたまま動けずにいる。

ともえ ママ、ピアノは？歌の練習は？

貴子 ……

ともえ ママ？

次郎、二階から降りてきて、ともえと貴子を見つけ。

次郎 あれ？あの人はどうした？

貴子 今、お帰りになりました。

次郎 そうか……

貴子 カズちゃんと口喧嘩なさつたつて、本当？

次郎 あの常磐のおたふく、珍しく議論してきたんで、コテンパンに論

破してやったよ。女中もあんまり長くいると、態度がデカくなっ

て良くない。

ともえ おたふく、つてなあに？

貴子 しーっ・・・！（そんなこと言わないの、という風に）

次郎 そんなことより、ちよつとそこに並びなさい。お前達に見せるものがある。

貴子とともえ、次郎の前に座る。次郎、自分の鞆から書類を一枚取り出す。

次郎 ……。（一枚の書類を、誇らしげに貴子達の前に置き）

貴子 なんですかの？これ。

次郎 湘南にある、社宅の見取り図だ。

貴子 え？

次郎 思い切つて、家族みんなで空気のいいところに移れば、幸子だつて一緒に暮らせるようになるだろう？ どうだ。

急に、停電になる。暗転。

貴子 きやっ！

ともえ ママ、何も見えないよ？

貴子 あらやだ、停電。ロウソク、・・・ロウソクはどこ・・・？

次郎 話を聞きなさい。ダイニングキッチンもあるんだぞ？！

人びとの声、嵐の音に飲み込まれてゆく。

4-1-1 東京タワー

昭和三十三年（1958年）、十月十二日。日曜日。東京タワーのアンテナ塔の設置と命名式が終わった三日後。日本電波塔のふもと。盛、ともえ、佐々木、がいる。

盛とともえ、それぞれがひとつづつ双眼鏡を使って、命名されたばかりの東京タワーを見ている。

ともえ ……。

盛 ともえ、何が見える？

ともえ 青い空と、縹雲です。

盛 うん。

ともえ それから、赤い綺麗な、東京タワーです。

盛 てっぺんがわかるかい？

ともえ ……はい。

盛 あれがテレビ局やラジオ局のアンテナになってるんだ。

ともえ すごい！

盛 佐々木。（自分の双眼鏡をかしてやろうと、佐々木にさしだし）

佐々木 あ・・・。（ひどく謙虚に受け取り）

盛 良く見ておきなさい。これぞ日本人のものづくりだよ。

佐々木 はい。

盛 工事の途中だけを見ているでもダメなんだ。完成したものを丁寧に

見つめて、そこまでの道筋をひとつづつ想像してみる。それが大事なんだよ？

佐々木

はい。

ともえ

選んで欲しかったな・・・。

盛

ん？

ともえ

クラスの皆で考えた、塔の名前。

盛

どんな名前で応募したんだい？

ともえ

きりん塔。

盛

きりんって、動物園にいる、あのノツポのきりんか？

ともえ

うん。

盛

(笑って) 惜しかったね。でも東京タワーだっていい名前じゃないか。グランパは気に入ったよ。

ともえ

うん。

佐々木

・・・。(双眼鏡を外し、ぼんやり東京タワーを見上げている)

盛

今日は元気が無いな？

佐々木

あ、や。

盛

飯は食ったのか？

佐々木

はい。それは。

盛

聞いたぞ？ついに、弁当のおかずが増えたって？

佐々木

あの。やっと、豆が入るようになりました。

盛

(楽しそうに笑って)

ともえ

あ。東京タワーって名前も、きりん塔と同じで、誰かが一生懸命

盛

考えてつけたのかな？

ともえ

そうだよ。良く気がついたね。

盛

グランパのお名前は、誰がつけたの？

ともえ

私が親からもらった名前はね、加納盛というんだ。

盛

・・・。

ともえ

貴子が君を産んだ時、どう呼んでもらうかとても悩んでね。グラ

盛

ンパって言うのは、英語でおじいちゃんの意味だ。

ともえ

そうだったの？

盛

そう。だから私の一番好きな英語は、ともえが呼んでくれるグラ

ともえ

ンパって言葉だな。うん、決まったぞ。宿題に書いときなさい。

盛

夏休みなんて、とっくに終わっちゃったよ！

ともえ

(笑って) そうだなあ。これはすまなかった・・・。

盛

でも、どうして英語の呼び名にしたの？

ともえ

盛は、ともえと向かい合い、その目をじっと見る。

盛 ともえがまだ生まれる前、そう、君のパパとママが結婚した頃、

大きな戦争があったんだ。聞いたことあるかな？

ともえ なんとなく。

盛 日本はその戦争に負けて、敵だったアメリカの兵隊が大勢日本に
来たんだよ。青い目の兵隊さん達が暮らす為に、どんどん建物が
作られた。グランパは、その建物に暖房設備をつけるのに大忙し
でね。

ともえ 凄い！

盛 私は年のせいで兵隊に行けなかったから、その時、初めてアメリ
カの兵隊を見た。勝った国の人間は、負けた国の人間の言葉は話
さない。でも、こっちが一生懸命工事したり修理したりすると、
丁寧に礼を言ってくれているのがわかる。ある時なんて、将校さ
んから感謝の印だってシャンパンを振舞われてね。その男が本当
にいい笑顔で・・・。鬼畜米英って言われた生き物がこれなのかっ
て、だんだんわからなくなってきた。だけど、南方で戦死したう
ちの番頭を殺したのは、目の前で笑ってる、その将校なのかもしれ
ないんだ・・・。ちよつと難しすぎるかな？

ともえ うん・・・でも、聞きたいの。聞かせて。

盛 グランパは、日本がなぜ失敗したのか、なぜ負けたのか、本当の
ことを知れたかった。それにはまず、負けた相手のことをよく知
らなきゃならない。相手を本気で知りたければ、相手の言葉を知
らなきゃならない。負けて新しくなったこの国で、がむしやらに
働くこと以外に見つけたもうひとつの答えが、英語を知る、とい
う事だったんだ・・・。いつか、ともえにこのお話をしたくて、グラ
ンパという呼び名にしたんだよ。

ともえ 日本は・・・負けた国なの？

盛 (頷く) 大切なのは、その先さ。闇の向こうに光を探し続けた人
達がちゃんとしているんだ。だからこそ、世界一の塔が建ったんだよ？
(赤い塔を見上げる)・・・。

ともえ

盛 ともえ。言葉はレンズと同じだ。外国語を知れば、海の向こうの
ニュースも、自分自身の目で見ることが出来る。いつか世界に飛
び出して、自分の目で、声で、言葉で、世界と対話できる人間に
なってくれ。そんな人間がひとりづつ増えれば、国と国が争うよ
うなあんな愚かなことは、もう無くなるんじゃないかって・・・。

ともえ

私、いつかコクサイテキジャーナリストになります！

盛 素晴らしい。いいじゃないか。

ともえ ねえグランプ、あそこから、世界が全部見えるかな？

盛 ん？

ともえ 私、東京タワーのてっぺんに登ってみたい。いつか、この目で世界の全部を見てみたい。

盛 クリスマスの頃になったら、あの展望台にも登れるそうだよ。そうしたら、おばあちやまも連れてこよう。

ともえ うん。

美代と山村がやってくる。手にポップコーンの箱をふたつ持っている。

美代 すみません、おやつ、お待たせしちゃって・・・。

盛 先生、ありがとうございます。

山村 いえいえ、だつてせっかく来たんですから。

美代 どうぞ。山村先生から。(佐々木にひとつ渡す)

佐々木 わあ。ポップコーン食べるの、僕はじめてなんです！

山村 ああ、それは良かった。

美代 ともえちゃん、はい。(ともえにも渡す)

ともえ 私、おやつはソフトクリームが良かった。

美代 あら、せっかく買ってくださったのよ？ (叱るように)

山村 あ。じゃ、これは僕が自分で食べよう。

美代 本当に申し訳ありません。

盛 美代ちゃんは初めてだろう？こんな近くで見るのは。

美代 あの。前に一度、お弁当を届けに来て。

盛 そうか。皆で小林君を見た日だ！(佐々木に)なあ？

美代 ええ。私にも、双眼鏡で見せてくださいました。

盛 せっかく山村先生もいるんだから、小林君も誘えば良かったかな。

美代 今日は、お母様と一緒に浅草においでに・・・。

ともえ ねえ美代ちゃん、ソフトクリーム買いに行きたい。(グランプへ)

ともえ いいでしょう？

盛 小遣いは足りてるか？

美代 私、奥様からお預かりしております。

ともえ やった。行ってきます！

盛 うん。

美代、ともえを連れて、もともと来た方向に退場。山村、何か熱心に読んでいる。

佐々木 (山村の手元の分厚いメモ帳を見て) なんですか、それは？

山村 東京タワーの見物に行くと言ったら、知り合いの大学教授が色々

と教えてくれましたね。

盛 ほう。

山村 自分でガイドブックを作ってきました。

佐々木

すごいなあ。

山村 じゃ、僕はちらつと、あっちの方も見て来ますので・・・

盛 (笑って頷く)

山村、美代達とは違う方向に退場。盛、双眼鏡を使ったりしている。佐々木は、ポツ
プコーンをつまんだりしていたが、ふと止めて。

佐々木 親父さん。今少しだけ、いいでしょうか？

盛 ん？

佐々木 あの。僕は。ホントは弁当のオカズ、一品減らしてもらわなくちゃ
いけないんです。

盛 ・・こないだの、ガスケットの破損と漏洩のことか？

佐々木 え。あ。

盛 良かれと思つて、木村が若いのに任せたんだと思つていたよ。

佐々木 もう、・・・もう二度と失敗しません！申し訳ありません。

盛 別に弁当のオカズを減らすことはないさ。たくさん食べて、腕を
磨きなさい。

佐々木 ・・・。

盛 なんだ？

佐々木 あの日、フランジのボルトを締める時、ふつと思つたんです。こ
こにいる人達のせいで、今でも苦しんでる人がいるのかな？つて。
どういうことだ？

佐々木 悪いこととして、刑務所の中で暮らす人達に、本当に暖房設備がい
るのかなつて。そしたら、ほんの一瞬、集中しきれなくなつて。

盛 それは違うぞ・・・。(優しく論じて)

佐々木 ごめんなさい。僕、技術だけじゃなくて、人間としての志が足り
ないんです、きつと。

盛 よし。いつそ日の丸弁当にしてもらうか？(冗談で)

佐々木 え。は、はい！そうしてください。もうそうしてください！

盛 (笑つて) 昔、やっぱり似たようなことを言った社員がいたよ。

佐々木 え？

盛 あの刑務所に、まだ戦犯がゴロゴロいた頃だ。ボイラーを設置し
に行く機会があつて。

佐々木 ・・・。

山村、戻つて来ながら。

山村 やあー、誘つていただいて良かった。今日は本当に愉快ですよ。

盛 良かったら、帰りに私の家で一杯やりましょう。

山村 や、まいったな、これは。

山村と盛、笑いあつて。

山村 (東京タワーを見上げ) うちも、そろそろテレビを買おうかな。

盛 おや、先生のところはテレビはまだでしたか？

山村 ええ。だってあれは、ひとりで見るともんじゃないでしょう？

盛 ええと・・・。

山村 佐々木君。ほら、あそこ。わかるかい？展望台の上。

佐々木 どこですか？

山村 (東京タワーの上部展望台部分を指し) この塔の、あそこから

つぺんの部分は、アメリカの戦車のいらなくなったのを、日本に
持ってきて溶かした、という材料で作ってあるんだそうですよ。

佐々木 戦車を？

山村 戦車というものには、一番素晴らしい鋼が使われているんだそう

です。

佐々木 ……。

秋風の中、三人の男は、それぞれの心持で東京タワーを見つめている。

4-1-2 留守番

同日、夕刻。加納家の居間の広縁に貴子がいて、次郎から受け取った社宅の見取り図
をじっと見つめている。奥に続く廊下から、りつが広縁にやってくる。

貴子 ……。

りつ おかえり。

貴子 あ。(見取り図をそっと畳んで)

りつ どうだったの？幸子ちゃんは。

貴子 幸子ったら、折り紙に興味を持ったみたいで。自分で自分の千羽

鶴を折っていました。・意味はわかかってないんですけど。

りつ まあ、そう。かわいいじゃないの。お医者様はなんて？

貴子 少しづつだけ良くなってるのだから、焦らず行きましようって。

りつ そう・・・。そうね。

お勝手の方から和子が登場。お盆に、りつのお茶と、貴子のお茶を載せてやってくる。

和子 あ。奥様もこちらで召し上がりますか？(奥のお部屋でなく)

りつ ええ、ありがとうございます。

貴子 ありがとうございます。

和子 どうぞ・・・。

和子、お茶を出す。以降、りつと貴子、出されたお茶を飲みながら。

りつ カズちゃん、今日は私達だけだから、夜は簡単なものでいいわよ。

和子 はい。

貴子 あら。鼓太郎さん達も、東京タワーにお出かけに？

りつ 今日は信州から小林君のお母様がいらっしゃるとかで、浅草見物のお伴をするんですって。

貴子 まあ、鼓太郎さんが？

和子 老舗のすき焼き屋に行くんだそうですよ？ともえちゃん達の方は

レストランに寄るそうですし、本当に素敵な日曜日ですわねえ。

、和子、お勝手の方に退場。

りつ 貴子と二人で晩御飯なんて、いつぶりかしらね。（嬉しそうに）

貴子 ……

りつ どうかしたの？

貴子 お母さん、あのこれ……。 （社宅の見取り図を見せて）

りつ なあに？（見取り図をまじまじ見る）

貴子 次郎さんが、年が明けたらこの家を出て、ここに越そうって。

りつ まあ……。いつそんな話になったの？

貴子 私から、お母さんに伝えるようにと言われていたんです。でも、

なかなか言い出せなくて……。

りつ これは、団地か何かなの？

貴子 湘南のこの社宅ならサナトリウムの目と鼻の先だし、空気がいい

から、幸子と一緒に四人で暮らせるだろうって。

そう……。

でも私。なんだか……。自信が無くて。

りつ （見取り図に女中部屋が無く不安で）女中部屋はどこにあるの？

貴子 家事が不安なわけじゃないんです。

りつ え？

貴子 お母さん……。恋心って何かしら？

りつ 恋心？・お前、まさか次郎さんの他に好きな人ができたんじゃないだろうね？

（慌てて）違います……。好きな人なんて、居ないわ。

りつ あなたは高杉のお家にお嫁に行ったんですよ？しゃんとなさい！

貴子 ……

りつ ピアノは、持って行けるの？

貴子 どうかしら。団地じゃよく、苦情が出るらしいから。

りつ じゃ、時々、弾きに帰ってらっしゃい。ともえちゃんと幸子ちゃんも一緒にね。

貴子 お母さん……。 （ふいに泣きたくなり）

りつ 何も、一生会えなくなるわけじゃないんだから、そんな顔するも
んじゃありませんよ？ホラ、笑って頂戴。
貴子 ……。

微笑みあう、りつと貴子。和子、電話口から戻っており、しかし広縁には行けずに、廊下でそっと聞いている。暗転。

5-1-1 冬の空

昭和三十三年（1958年）、十二月二十四日。水曜日。夕刻。

盛、りつ、山村医師、次郎、鼓太郎、松島、佐々木、美代、和子、が賑やかに洋間に集まっている。クリスマスパーティーのようで、松島と佐々木は、クリスマスの三角の飾り帽を被っている。鼓太郎、洋間の奥のピアノの部屋に準備の様子を覗きに行つて、鼓太郎 ではっ！（と、率先して拍手をする）

一同、拍手。と、奥のピアノの部屋からともえが顔を半分のみかかせて。

ともえ ……。

和子 ともえちゃんん…！（掛け声で応援する）

松島 よっ、日本一！

ともえ、勇気をもって登場し、待っていた家族にペコリと頭を下げる。貴子の弾くピアノの伴奏の前奏が流れ出す。ともえは唱歌の『冬景色』を歌う。

ともえ さ霧消ゆる 湊江（みなとえ）の

舟に白し 朝の霜

ただ水鳥の 声はして

いまだ覚めず 岸の家

鳥（からす）啼（な）きて 木に高く

人は畑（はた）に 麦を踏む

げに小春日の のどけしや

かへり咲（ざき）の 花も見ゆ

ともえは、歌いながら、和子と美代の手をとって、歌に巻き込む。

玄關の方から、木村に連れられて、小林がやってくる。洋間の外の廊下で、そっと歌を聞いている木村と小林。何人かが小林に気づくが、前で歌うともえ達は気がつかず。

三人 嵐吹きて 雲は落ち

時雨（しぐれ）降りて 日は暮れぬ

若（も）し灯火（ともしび）の 漏れ来（こ）ずば

それと分かじ 野辺（のべ）の里

歌い終わり、ペコリをお辞儀をするともえ。一同拍手。と、木村、ともえ達にわざと小林を見せて驚かす。次郎は、娘の歌に感動して少し泣いている。

ともえ あ・・・！小林君！？

木村 メリークリスマス！（小林君が俺からのプレゼントという風に）一同笑ったり、はしゃいだりして。ピアノの部屋から、貴子も顔をのぞかせる。

盛 よく来たね。

小林 お久しぶりです。

りつ まあ、本当にお元気そうで。

小林 や、ご無沙汰してしまっ・・・。

りつ いつ東京に？

小林 昨日、東京タワーの完工式がありましたもので。あのコレ、少しですが・・・。（林檎の入った袋を、りつに渡す）

りつ まあ、ありがとう。（袋の中から林檎を取り出したりして）

盛 オイ、カズちゃん。

和子 お銚子は、今日はもう沢山用意してございます。

りつ 奥のお部屋に宴会の支度をしてありますので、ぜひ一緒に。

小林 や、僕は、今日は本当にご挨拶だけのつもりで・・・。

盛 何を言ってるんだ。飲もう。（山村へ）先生、小林君が来たんじや、

今日はお泊りいただきますよ？

山村 や、まいったな、これは。

皆、笑う。一同、続々と奥の部屋に移動する。次郎は最後までソファに残っており、煙草に火をつける。りつ、美代に林檎の袋を渡し。

りつ ★美代ちゃん、これ、お勝手の裏口の林檎箱にしまっておいて。

美代 はい。（袋を受け取り、お勝手の方に退場）

ともえ ☆パパ。ともえの歌、どうだった？

次郎 うん、素晴らしい。

ともえ うふふ。

貴子 良かったわね、ともえ。

ともえ ねえ、カズちゃん、わたしの歌、どうだった？

和子 ええ、本当にかわいらしくて、お上手でしたよ？

ともえ、はしゃいで和子の手とり一緒に奥に向かおうとするが、貴子に呼びとめられ。

貴子 明日の宿題だけ、先にすませちゃいなさい？いい子にしないと、

今夜サンタさん来ないわよ？

ともえ はい。

ともえ、今日は素直に二階に向かう。貴子も、追って二階に向かおうとするが、

次郎 オイ。あの曲を選んだのはお前か？

貴子 え？

次郎 とても、懐かしかったよ。ありがとう。

貴子 はあ。曲を選んだのは、学校の先生ですが。

次郎 ああ、そうだったか……。 (少し寂し気に)

貴子 歌がどうかしましたの？

次郎 ホラ……。帝国ホテルで。

貴子 帝国ホテル？

次郎 二人で式を挙げて。で……。そののち、歌っただろう。

貴子 そののち？

次郎 オイ、まさか、私と式を挙げたことを忘れたのか？！

貴子 とんでもない！もちろん結婚式は覚えています。でも、そののち、

と申しますと……。式を挙げてひと月もしないで、羽田からお見

送りしたでしょう？あなたが南方の戦地に行く大変な時期に、私、

のんきに歌なんぞ歌ったかしら？と思って。

次郎 ……。

貴子 ね、それより、お願いしてあったもの、大丈夫でした？

次郎 え？

貴子 (声を潜めて) フラフープ。

次郎 ああ、安心しなさい。それなら納戸に隠してある。

貴子 ありがとう。絶対、ともえに見つからないようにね。

次郎 本当にあれで良かったのか？ただのポリエチレンの輪っかだぞ？

貴子 僕は、ハイネの詩集をあげたかったんだけど……。

美代が、お勝手の方向から登場。

美代 ああ。

貴子 どうしたの？

美代 今、お勝手の戸を開けたら、裏口にお客様が。

次郎 お客様なら、玄関にお通ししなさい。

美代 それが、玄関に上がれる身ではないからと仰って。

次郎 どういうことだ？

美代 大変遅くなって申し訳なかったと、深く頭を下げられて、これを

高杉貴子さんに、と。

貴子 私に？

次郎 美代、ボロボロになった一通の手紙(封筒)を、貴子に渡す。

次郎 あ。(手紙に見覚えがあり)

貴子 高杉次郎？これ、あなたからですよ？

次郎 宮坂君だ・・・!

貴子 え?

次郎 終戦の時、ペナン島で一緒だった男だよ。

貴子 まあ。

次郎 おい、すぐ玄関にお通しなさい!

美代 あの、もう、駅に向かわれて。汽車の時間があるとかで。

次郎 ・・行ってくる!

次郎、弾かれたように立ち上がり、宮坂を追おうと、お勝手の裏口の方に急ぎ退場。

美代 すみません。気が回らなくて。

貴子 美代ちゃんのせいじゃないわ。

美代 少佐殿にあわせる顔が無いと、しきりに仰っていました。

貴子 そう・・・。(貴子、手にした封筒を見つめる)

5-1-2 林檎とレモン

二階から、ともえがノートと筆箱を手に降りて洋間を覗き。

ともえ ママ、宿題、見てくれないの?

貴子 あ。じゃ、あっちの居間で見ましようね。

美代 ともえちゃんに、何かお持ちしましょうか?

貴子 ありがとう。

美代、お勝手に退場。貴子は、次郎からの手紙を失くさぬよう、とっさに洋間の棚の

抽斗にしまう。ともえは共同の居間の座卓に座り、書き取りのプリントを置く。貴子

も居間へ。と、酒に弱い松島がさっそく酩酊して、三角帽子のまま鼻歌で奥から来て。

松島 あ。親父さんが探してますよ? 貴子はどこだ? って。

貴子 お父さんが? (立って、すぐ奥に行こうとし)

ともえ ねえ、ママ。丸つけしてよ?

松島 お。書き取りかい? (お茶場の菓缶から湯呑に水を注ぎ、飲み)

ともえ うん。

貴子 じゃ、奥のお部屋で見ましようね。お行儀よくするのよ?

ともえ はい!

ともえと貴子、宿題セットを持って、奥の宴会の部屋に駆けるように向かう。松島は、

酔っぱらって畳にひっくりかえっている。和子、貴子とすれ違うように、奥の部屋か

ら登場、松島を起こし。

和子 タケちゃん、旦那様が腹踊りしてくれって!

松島 おっ・・・!

松島、跳ね起きて、腹踊りのために奥の部屋に急ぎ退場。和子も笑いながら一緒に急

ぎ足で去る。誰も居ない居間。美代、盆にレモン水を乗せてお勝手の方から登場。

美代 ・・・・?

美代、どうしたものかと、レモン水の盆を置き、座卓のそばの畳に座る。小さく溜息をつき、エプロンのポケットから、以前、小林にもらったてぬぐいをそっと取り出して眺め、なんとなしに、首にかけてみる。美代は、てぬぐいの手触りを感じる。奥の部屋から、小林がやってくる。

小林 あ。

美代 ……。(急いで立ち上がり、ペコリとお辞儀をする)

小林 林檎を少し、剥いてもらえませんか？皆さんに、お出ししたくて。

美代 はい。

美代、お勝手の方に行こうとし、広縁に出る。と、小林が美代を呼び止め。

小林 あの。

美代 はい…。

小林 今頃は、あなたの故郷ではレモンが鈴なりでしょうね。

美代 ああ、ええ。

小林 ありがとうございます。

美代 え。

小林 手ぬぐい。

美代 あ。(自分の首にかけていたのに気がつき)

小林 ありがとうございます。使ってください。

美代 そんな…。

小林 お元氣そうで、本当に良かった。

美代 ……。

小林 僕。あなたのおかげで、最後まで怪我もなく、東京での仕事を終えることができました。もしお嫌じゃなかったら、東京タワー、いつか見に行ってみてください。

美代 ……。

小林 あの、じゃ。(奥に戻ろうとして)

美代 見に行ったこと、あります。

小林 え。

美代 まだ、東京タワーになる前に。

小林 ……。

美代 赤い塔のてっぺんにいるあなたは、空の中でお仕事をしているように見えました。とても綺麗で、輝いていらっしゃいました。

小林 ……。

美代 希望を沢山いただきました。こちらこそ、本当にありがとうございます。ありがとうございました…。

美代、小林を見つめたのち、頭を下げながら、お勝手に行こうとする。

小林

美代さん！もう一度だけチャンスをくださいませんか？いつか、日本電波塔より、もっと大きな仕事をして、あなたに釣り合うような、本物の男になります、ですから。

美代

釣り合うだなんて、そんな。

小林

次男だって言ったけど。本当は、それだけじゃないんです。僕と弟は、親父が妾に生ませた息子です。

美代

え？

小林

男だということ、本家で兄貴と一緒に育ちましたけど。お袋はもともと、林檎農家から女中に来ていた娘でね。

美代

・・・

小林

でも、一度会っていただければ、母のこと絶対わかってもらえると思っただけです。お袋は、学はありませんが、真面目で優しい人間なんです。慎ましい人なんです。

美代

・・・

小林

ごめんなさい。本当のことを言わないまま、浅草に誘ったりして。僕の引け目は、全部キツパリお話ししました。こんな男ですが、どうかもう一度だけ、

美代

少し、お話をしてもいいですか？

小林

え。はい。もちろん。
ほんの少しだけあたりを伺って、小林と並んで座り。

美代

よよよ三姉妹のお話、覚えていますか？

小林

よよよ？

美代

上の姉が、千代で。

小林

ああ、そうだ、妹さんが紗代さんでしたね？

美代

昔。わたしと紗代と父の三人で、尾道から、山口県の平生町に、親戚の結婚式に行ったことがあるんです。私が十一で、紗代が七つの、夏でした。

・・・

小林

美代

千代姉さんは、お産で里帰りしていたところだったので、母と一緒に留守番で。私と紗代は、父の相伴に抜擢されて、大はしゃぎでね。・・・でも、一泊して尾道に帰ろうとした日。汽車が、岩国の駅で止まってしまったんです。父ちゃんが駅員さんに色々聞いても、「広島に何かあったらしい。汽車はいつ出るかわからぬ」と言うばかりで。仕方なく岩国で一泊して、次の日の午後、「途中でしか行かないが、それでも良い人は乗れ」と言われて、三人で汽車に乗りました。宮島辺りまで来ると、駅に傷だらけの人がい

て、汽車にも、血を流した、異様な姿になった人達が、ポツポツと乗ってきて・・・。

小林 美代さん、

美代 広島駅の手前あたりで、降ろされて、そこからは、日が暮れるまでひたすら歩きました。父の手をぎゅっと握ったまま、私はいつのまにか、怖くて目を閉じてしまっていて。何度も、ズリりと剥けるようなものを踏んで、目を閉じていても、それが死体だとわかったことを、ハッキリと覚えています。紗代はぐずって、途中で何度も井戸の水を飲んで・・・。

小林 美代さん、もういいから。

美代 父は、ピンピンして今も元気にレモンを作っています。でも、私も紗代も、十三年前の被ばくのが理由で、縁談がダメになったことがあるんです。あなたに釣り合いの取れないのは、私の方なんです・・・。小林さん。てぬぐい、一生大切にします。ありがとう。

小林 ……。

奥の部屋に続く廊下から、佐々木、松島、木村、が笑いながら現れる。

松島 あれれれれれ・・・？（二人をからかうように）

木村 メリークリスマス！

佐々木 ねえ、美代ちゃん。クリスマスの帽子、もっとあったよね？どこ行ったかな？

美代 ピアノのお部屋にございます。

佐々木 （木村に）ホラあ、やっぱりあるじゃないですか。

木村 いいよ、俺は・・・。（笑顔だが、できれば被りたくなくて）

佐々木 何言ってるんですか！山村先生も被るって言ってるんですから！

佐々木、松島、木村、洋間にゆき、奥のピアノの部屋に賑やかに退場。

美代 林檎、剥いてきますね。

小林 美代さん・・・。

美代はお勝手の方に退場する。小林は、しばしの間ののち、意を決したように美代を追ってお勝手へ退場する。奥の部屋からは、歌のアンコールをせがむ拍手が聞こえる。宴会の喧騒をそっと抜け出た貴子が、奥の廊下から広縁にやって来る。廊下の奥からはともえの歌声が聞こえている。他の人々の声も、歌に重なってゆく。貴子は、年が明ければ出て行く、この生家の居間を、ふと見つめる。三角帽を持った、佐々木、松島、木村が広縁を通り、貴子と笑顔ですれ違う。貴子、そのまま洋間に行き、先ほど抽斗にしまっておいた、宮坂が届けた次郎からの手紙を、そっと取り出す。ソファに座り、封を切る。

貴子 ……

貴子、手紙を開き、文面を読む。宮坂を追った帰り道の次郎が、歩道橋の上でひとりきり、冬の空と、そこに輝く月を見ている。次郎の口から語られる。遠い日の手紙。

次郎

拝啓。終戦以来、内地も外地も文字通り未曾有の歴史的大変転をしつつありますが、自分は幾多の苦しみを経て、現在、シンガポールにて、終戦処理に大切な仕事をしております。身体極めて頑健。終戦前よりもむしろ良好です。君からの便り、届きました。

よくぞ達者で居てくれたね。きっと今が最も苦しい時です。こんな時こそ、真の日本婦人の強さを見せることです。必ず、元気でいてください。そちらに戻れるのはどんなに早くとも来年の春のこと。こちらは、暦の上ではもう冬のはじまりです。昨晚、不思議なことがありました。心の慰めに、ふと南国の月を見上げてみると、遠く、あなたの声が聞こえたのです。本当に聞こえたのです。僕は感動しました。たったひと月限りの新婚生活でしたが、僕たちは、やはり夫婦なんだと。覚えていますか？私達が、初めて夫婦になった日の朝に、あなたが帝国ホテルのバルコニーで、小さな声で歌っていた、あの冬の歌です。また、声を聞かせてください。僕も、ひとつだけ歌を贈ります。

海陸（うみりく）の 幾百万里隔つとも

変わらぬものは 想恋（おもい）なりけり

必ず生き抜いて、帰ります。草々。高杉次郎。

貴子

……

窓の外の冬の間を見上げていた貴子、遠く離れた在りし日の夫と、目が合う。次郎は、そっと微笑んでいる。微笑み見つめあうふたりを、優しい月明りが包んでいる。溶暗。

6-1-1 月を見上げる夜

昭和四十四年（1969年）、七月十六日。水曜日。アポロ11号が、月に向けて地球を飛び立つその日は、七月にお盆をする東京の、送り盆の日でもある。宵の口。洋間でともえが天体望遠鏡をのぞいている。少し離れたところには盛がおり、ともえを見守っている。だが、ともえには見えていないようだ。

ともえ ……

ともえ、天体望遠鏡をのぞいていたが、そっと目を離し、登ったばかりの月をじっと見上げている。麦茶のグラスを盆に乗せた和子が、洋間にやってくる。

和子

ともえちゃん？

ともえ

あ……

和子 ママと幸子ちゃんが戻ったら、そろそろ、送り火を焚きましよう

か？

ともえ はい。

和子 それ、まだちゃんと見えますか？（天体望遠鏡を見て）

ともえ ええ、とても。

和子 そう。良かった。

ともえ こんなに空を見たのは、なんだか久しぶり。

和子 今日の夜空は、本当によく晴れて。いいお月様ですわね。

ともえ アポロ11号は、本当に月に着くかしら？

和子 そうね。

ともえ そうしたら、どんな未来が見えるのかな？

和子 うふふ。

盛 とてもえ、何が見える？

ともえ、誰かに呼ばれた気がしてふと振り向くが、ともえの目に盛達の姿は見えず。

ともえ ……。

和子 どうしたの？

ともえ ううん。今ね、グランパのこと、思い出していたの。

和子 そう…。

ともえと和子、微笑みあう。二人、月を見上げる。

気が付くと、盛、りつ、鼓太郎も一緒に、天体望遠鏡のまわりに集まっている。

だが、和子とともえには、見えていないようだ。

東京のお盆の夜空の下で、生きている人も、かつて生きていた人も、いつまでも一緒に、白く輝く月を見上げている。溶暗。

（おわり）

|| 上演時間 約135分 ||

<上演記録>

初演：2017年11月 吉祥寺シアター 青☆組 vol.24

著者：吉田小夏

- * 本作品の上演をご希望の方は、青☆組へお問い合わせください。
- * 乱丁・落丁などございました際には、お手数ですが下記にお問い合わせくださいませ。

<お問い合わせ>

office@aogumi.org

青☆組 www.aogumi.org